
フライ・フィッシャーズ

カカオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フライ・フィッシュヤーズ

【NNコード】

N4691Z

【作者名】

力力才

【あらすじ】

その民宿は海辺にあった。概観はお世辞にもきれいとは言えず、くたびれたそれだった。そこにはどういうわけかワケあり客が集まり、従業員もワケありで悩みを抱えていた。それぞれの悩みが渦を生み、風を起こし、やがては台風となる。そんな嵐の中を、彼らは空を泳ぐこいのぼりの如く飛びができるのか。

民宿熊島を舞台にした群像劇が、今までに幕を開ける。

201号室の掃除

右手に掃除機、左手に掃除機のホースを持ち、熊島新は一階へと続く階段を上つている。額から汗の粒が尋麻疹みたいに大量発生し、拭つても拭つても生産され続ける。

「あちー」

新は独り言を呟いた。

今日は六月二十五日、土曜日。天気、晴れ。湿度、スーパー高え。とにかく蒸し暑いのだ。先週までは梅雨らしく連日雨を投下していたお天道様も、やがてそれに飽きて今度は太陽光線による熱照射攻撃に切り替えた。

連日の雨による湿氣と昨今の温暖化も手伝つて、日本古来より代々受け継がれている蒸し暑さが、よりバージョンアップして今年も引き継がれてしまった。人間どもが暑さで苦しむ姿を、お天道様はさぞ愉快そうに眺めていることだらう。

一階廊下に到達。

左側に窓が真つさらなテストの答案みたいに何もない空を映し、右側には201、202、203号室のドアが三つ並ぶ。
新は一番近くの201号室のドアをノックする。

返事はない。ただのドアのようだ。

いやいや、奥には201号室のお密さんがいるはず。新は腕時計を見る。去年、砂浜の掃除の最中に拾つたその見るからに安物のデジタル式の腕時計は十時三分を示している。

この時間、彼女は朝ごはんを食べ終えてうだうだししている時間だ。

「たぶん、いる。
滝川さん」

お客さんの名を呼ぶ。返事はない。

そこで新は思い出す。201号室のお密さんがいつも口づねかべ言つていたことを。

「はあ……」

新は嘆息し、そのカタカナ五文字の名を呼ぶ。

「……クリステルさん」

新がそう呼ぶやいなや、ドアは待つてましたといわんばかりに開けられた。明らかにドアの前でスタンバっていたものと思われる。

「よー、青少年」

201号室のお客さん

滝川花子たきがわはなこは挨拶した。

実年齢は一十四歳のことだが、実際の見た目は二十歳、いやそれより下にも見える。小動物めいた可愛らしさ、ぽわぽわふわふわした雰囲気を振りまいているが、はつきりとした物言いと遠慮と容赦と礼儀のない振る舞いで、見た目から窺えるキャラを崩壊させている。

「あの滝川さん、部屋の掃除を

「あたしのことはクリステルと呼びな」

滝川は間髪いれず訂正した。譲れないらしい。

「は、はあ……すいません。それでの……クリステルさん、部屋の掃除の時間なので、少しの間外に出ていて欲しいんですけど」「あーはいはい」

滝川は面倒臭そうに返事をすると、財布と携帯電話をジーンズのポケットに突っ込み腕時計を装備、さらに皮製の大きな手帳を無理やり尻ポケットにねじ込む。部屋の外に出る。

彼女は新とすれ違うとき「アンタも高校生なんだからもつと遊びなよー」と声をかけ、階段を降りていった。

これはこれで楽しい仕事なんだけどなあ。

新はそう思いつつ、掃除機のコンセントを差込み、201号室を見渡す。隣の部屋の久野くの一太から借りたらしきマンガ本が何冊かベッドの上に放されている。机の上には朝ごはんの食器類が盆に載せられている。本当は食器類の片付けはセルフサービスで、各自がダインニングの流しまで持つて行かなくてはならないのだが、滝川はよく忘れて部屋に放置してしまう。

新は掃除機のスイッチを入れようとして、すぐに取りやめる。部屋に転がっているスーパー・ボールを片付けてからでないと、掃除機が吸い込んで壊れてしまうかもしない。滝川の部屋にはなぜかスー・パー・ボールがいくつもころころと転がっている。赤、黄、緑、青、キラキラしたようなものまでカラフルに揃っている。その一個一個を拾つて小さなかごにまとめて机の上において置く。たぶんまたすぐにならかるだろうけど。

さて、と。

新は掃除機を起動させる。

この時間帯は『民宿熊島』の掃除の時間なのである。

私は異常なし異常なし。異常あり。

*

やつちまつた。滝川はまずそつ思つた。
あたかも誰かを殺してきたような「コアンスが窺えるが、幸い滝
川は殺人犯ではない。

彼女は砂浜に寝そべり、横を向いて愛車『赤い彗星号』（ふつーの自転車）を見やる。滝川と同じく寝そべるようにぶつ倒れている。さび付いて赤い部分がほとんど侵食され、酷い有様だつた。まあ、さび付いたのはもつと前からだけど。『赤い彗星号』というのは、前に付き合つていた元カレがつけた名前だ。何かのアニメにちなんだ名らしく、三倍のスピードで走れるとかどうとか。滝川はその元ネタはわからないし気にしてもいなかつたが。

ゴールデンウイークが明けて二日目、休みでもなければ夏でもない、ましてや時刻は夕方四時半、砂浜にはあまりいなかつた。犬の散歩をしているおばさんが横になつている滝川のほうを奇異の目で見てくる。

黒のパンツスースにヒールという出で立ちで砂浜に大の字になつているのだ。しかも頭から爪先まで既に砂まみれで、奇怪に思われても仕方がない。

「あおーん」

突然発せられた滝川の咆哮に、おばさんはぎよつとして犬を引きずつて逃げるよう立ち去つた。

「あつはつはーザマーミやがれつ。あつはつは……はつ……はー」

滝川の笑いは溜息に変わつていく。「はー、どうするかなあ

最初は乗り物酔いかと思つた。

通勤電車の中で、滝川が体の不調を感じるようになつたのは、大學を卒業し会社員生活が始まつて一週間ほど経つたときだつた。大

疲れてるからなー、あたし。

働き者だからなー、あたし。

頑張つてるもんなー、あたし。

色々と言い訳をしてみた。誤魔化してもみた。けれど自分に嘘をつけばつくほど、体の不調は酷くなつていつた。

苦しい。心臓が、苦しい。

乗り物酔いなんかでないのは間違いなかつた。もし乗り物酔いなら気持ち悪くなるはずで、心臓を驚撃みにされて握り潰されているよつな苦しみや痛みを感じることなどない。

けれど病院で診てもらつても、異常なしと言われた。

滝川はこの『異常なし』を信じじることにした。

異常なし。

異常なし。

わたしは、異常なし。

もちろん、異常あり、だつた。

滝川が住むアパートから会社までは電車を乗り継いで一時間かかる。最初の頃は苦しくても我慢して会社まで辿り着けた。

しかし徐々に苦しさは増していく、乗り換えの駅で休憩するようになつた。会社までかかる時間は一時間十分になつた。

乗り換える駅まで我慢できなくて、途中の駅で降りるようになつた。会社までかかる時間は一時間一十分になつた。

降りて休憩する感覚が徐々に短くなつた。ついには一駅に一度降りて息を整えなければ体がもたなくなつた。会社までかかる時間は二時間となつた。

そんなことを、滝川は一年以上続けた。

でも、とうとう限界がやつて來た。

ゴールデンウイークが明けて一日後、滝川は電車に乗ることもで

きなくなつた。

苦しいとわかつててなんで乗るの？

コレに乗つてどこに運ばれちやうの？

なんでわたしは運ばれちやうの？

自分という存在が、長距離トラックに運ばれる荷物の一つにでもなつたかのように思えた。一人の命じやなくて、一つの物。運ばれていく、一つの物。荷物。

滝川は逃げた。

電車に乘らずに駅を出て、駐輪場に停めてあつた赤い彗星号にまたがつてペダルを必死にこごだ。とにかく駅から遠ざかりたかった。半ばヤケクソ氣味に。

なにかを求めるよう。

近所の国道を道なりに突つ走り、大きな橋を渡り、また道なりに自転車を走らせ、途中から有料道路になつて車しか通れなくなつたので回り道したら、荒涼とした工業団地に突入してびっくりした。ドンドンカンカン音を立てる無機質な工場と煙をもくもく噴き上げる煙突、ひび割れた墓石のような団地。

ここは世界の果て？

そんなことを思つた。

そして滝川はその団地を抜け、せりて自転車をこいで海までやつてきた。九時間以上かかつた。

脚はもう使い物にならないほど疲れていて、いつそ切斷して海に放り込んでやりたい気持ちにかられたが、そうしたら足の爪にマニキュアを塗る楽しみがなくなると思つてやめておいた。

海まで自転車で来られたのは、前付き合つていた彼氏がよく運転していた道を覚えていたからだ。

ふと携帯の存在を思い出して、すぐ近くに転がつてているバッグに腕を伸ばす。腕時計が日光を反射して眩しい。いかにも高級な腕時計らしい輝きに思えて、滝川は溜息をつく。どうしてこんなもん買っちゃつたんだよあたし。

携帯を確認すると、恐ろしい数の着信とメールを受信していた。会社の上司の福岡靖男やその他同僚の皆々様、母にまで連絡がいつているらしく『オカソ』という名前まで着信履歴に名前を並べていた。さらに元カレの名前まであったのには本当に驚いた。

「なんてこつたい」

面倒なので、携帯の電源は切った。ついでに自分の電源も切るべく瞳を閉じた。

ヘイ、ネーチャン

何者かの気配を感じて、滝川は目を開けた。

「うわー、砂と潮風で髪の毛がガビガビだ……ん？」

上から某子供店長ばかりにかわゆい少年が滝川を見下ろしていた。

小学校低学年だろうか。切りそろえられた前髪がかわゆすぎる。

「ヘイ、ネーチャン。添い寝してあげよーかい？」

少年は言った。某子供店長とは雲泥の差である。

「少年、ナンパの仕方がなってないぜ」

「えつ　　」

絶句する少年。相当自信があつたらしい。

十七秒ほど思案し、少年は何かを思いついたらしい。自信ありげにこう言った。

「ヘイ、ネーチャン。おっぱい揉ませろや」

ぶつ叩いてやつたのは言つまでもない。大人としてしつかりと教育しどとかねば。

やれやれ、と嘆息し、滝川は再びじろりと砂の上に横になつた。

「ネーチャン、名前なんつうの？」

まだいたのか。

無視した。

「おれは久野一太つていうんだ」

訊いてない。

「あだ名はクノイチ」

だから誰もそんなこと訊いてない。

「小学五年、独身」

独身て。あたりめーだ。

「礼儀知らずだよネーチャン。名乗られたら自分も名乗らないといけないんだよ」

まつとうなことを言つているようだが人の胸を揉ませろだとかい

うヤツに礼儀知らずなどと言われたかない。

「へイ、ネーチャン」

いつの間にか少年は滝川の頭部の横に腰を下ろしていた。ハーフパンツから覗く脚は女の子かと思うほどに白くてすべすべしてそうだった。「へイ、ネーチャン。名前なんていうの？」

だーもーしつけーなー、と思いつつ、滝川は少し嬉しかった。話しかけてくれる人がいることに。一人でいると、本当に世界の果てに来てしまったようで恐かつたからだ。

「あたしは滝川」

苗字まで言って、ふとあの女の顔が頭に浮かんだ。きれいで華やかで、向こう側の世界の住民のあの女の顔が。

「……する」

「お?」

「クリステル……滝川クリステルなのだ」

滝川は言った。ちなみに本名は滝川花子。

「おお、外人？ ハーフ？」

「琉球人とアイヌ人のハーフだよ」

母の出身は沖縄。父の出身は北海道。

「よくわかんないけどスゲー。クリスタル姉ちゃん

「クリスタル違うつづりの。あたしのことはクリステルと呼びな

失敬なナンパ少年　　クノイチと不本意で嘘っぱちな自己紹介を交わした後も、滝川はクノイチと話しぶなし。会話していくにつれて、クノイチが近くの民宿に泊まっていることがわかつた。

見たところ周囲にネットカフェやビジネスホテルなんか無さそうだったので、これ幸いと滝川はクノイチにその民宿まで案内をさせた。

クノイチについて行つた先は歩いて二十分ちょっとのところにある『民宿熊島』だった。

とりあえず寝床確保、と。

滝川は小さく安堵の息を吐いた。

『民宿熊島』は海沿い、目の前が砂浜という津波が来たらまず一番最初に流されそうな場所にぽつんと建っている。

外観は遠くから見れば悪くはない。白を基調とした壁面に赤い屋根、正面入り口には広々としたウッドデッキがあり、客がくつろげるテーブル席も設けられている。

けれど接近して見ると、ボロい。

白い壁面は明らかに素人がペンキを塗ったであろうムラのある雑な仕事、赤い屋根は赤茶けて汚くなっている。ウッドデッキは所々が朽ちて耐久性に一抹の不安を感じさせる。

滝川はそんなこと気にもしなかつたが。

屋根があつて床があつて、そして人がいる。
それだけで十分だつたからだ。

信じられないことに、民宿にはクノイチがたつた一人の客だつた。
滝川は最初ホームアローン状態のクノイチを不思議に思った。

クノイチは民宿の客ではあるが、あたかもこここの住民のように生活していた。民宿で寝食をするのはもちろん、学校もここから通っている。帰つてくる場所も民宿。

いつたい家はどうしたんだろう？ ていうか宿費は払えてんの？

滝川はある日、そんな疑問をクノイチにぶつけた。

「おれのお父さんとお母さん、仕事で忙しいから」
答えはそれだけだつた。

あまり触れられたくないのだろう。滝川はそう判断し、それ以上何も訊かなかつた。滝川にだつて触れられたくないことの一つや二つある。それに民宿の人はクノイチを普通に扱つている。親公認なのだから問題はないのだろう。本人がどう思つてているかはまた別だが。

民宿にはクノイチのほかに、ここの中の主の熊島紀伊介くましまきいすけというおじい

さんと、その孫で高校生の熊島新がいた。この一人が民宿を切り盛りしているようだが、主に立ち働いているのは新だった。紀伊介はいつもぼんやりとウッドデッキのテープル席に座り、海を眺めながら紫煙をくゆらせてこむ。暢気な隠居生活だ。

会社からはやたらと電話がかかってきて、一度だけ出たら凄い怒鳴られた。上司の福岡だった。

滝川は「もう辞めるっぢゃ」とふざけて言つて電話を切つた。それからしばらくは携帯の電源を切つていた。最近は電源をつけてはいるが、全ての着信とメールを無視している。

とりたてて目的があるわけでもない。お金は使う暇すらなかつたからたくさんある。ひとまずの長い休暇だと思つて、滝川はのんびりすることにした。

そして、周囲には自分をクリステルと呼べと強要した。

それでは、次の「コースをお伝えします

『民宿熊島』に宿泊して六日目、最初の日曜日、その日の夜。滝川は泊まっている部屋 201号室でぼんやりとテレビを見ていた。画面はニュース番組を映していて、政治家の問題発言を問題にして肝心な問題は置いてきぼりにしていることを問題にしていた。この国は問題だらけである。

まあ、滝川はニュースを見ているのではなくて、彼女を見ているだけだったのだが。

『それでは、次の「コースをお伝えします』

滝川クリスティルが、画面の向こうで言った。

DNA配列に日本とフランスの螺旋が混合しさらに美に特化させた結果のような顔つきに、きれいなのに力強い瞳。華やか過ぎて周囲の色がくすんで見えてしまう。周囲というか、主に自分が。

「同じ滝川なのに」

どうしてこうも違うんだろ。

テレビをぶん殴つてやろうかと思つたけど、目の前の14型ブラウン管テレビには責任はないことを思い出し、枕にバフツと拳をめり込ませたり、クノイチと駄菓子屋へ行つたときにハズレくじでもらつたスーパー博一を思い切り壁に投げて我慢した。スーパー博一はぱこぱこと壁に跳ね返つて最終的にはテレビに直撃したが。もしあたしにフランスの血が混じつていたら、あたしもクリステルみたいになれたんかなあ。

滝川クリスティル。

あたしは、滝川花子。うーん、納得いかねー。

「クリスタル姉ー、あーそーぼっ」

ドアの向こうからクノイチの声がした。夜の十時過ぎだとうのに、まったく最近の小学生は、誰がドアを開けてやるものか。厳しくしつけないといけないね、うん。

「ガキはもう寝る時間だろーが。それと、あたしのことはクリスティルと呼びな

「モンハンやろうぜい」

滝川はすぐにドアを開けた。PSPを一台持つて一ヒッとしているクノイチがいた。滝川もニカッと笑った。

その日は朝までモンハン大会だった。

なんかねえ、記憶喪失らしょ

滝川が『民宿熊島』に泊まり始めて一週間ほど経ったころ、一人の女の客がやってきた。

滝川は自分の部屋の窓から、その女が民宿に入つてくるところを見ていた。凜としたキャリアウーマン風の感じだったが、実際に話してみるとスローで上品なマダムといった佇まいだった。

とてもきれいな女で「妖艶」という単語を当てはめたくなるような雰囲気をかもし出していた。見たところ三十過ぎぐらいか。なんだか滝川クリステルと似たようなオーラを感じないでもない。

上品、気品、品格。

それら上等な質感めいたものを体の表面にぺたぺた貼り付けて歩いているように見える。

あーそつそつ。コレも忘れちゃいけない。
巨乳。

胸元が目立たない服装で誤魔化しているようだけど、誤魔化しきれていない。まごうことなき巨乳けやんである。鷺掴みにしようにも手からこぼれるに違いない。

彼女は滝川の部屋の隣の隣、203号室に泊まり、三日経つても四日経つても泊まり続けている。

いつたいいつまで泊まるつもりなんだ？　いい大人が平日のに休んで民宿に泊まるなんて何かワケありかも。警察から逃げてるとか？

自分のことは棚にあげて好き勝手考える滝川だった。

そして彼女は五月の末日の夜、クノイチを偵察にやつた。クノイチは十分ほどで戻ってきた。

「どうだつた？」

「スゲーおっぱいだつた」

「なんこと訊いてないよ」

「クリスタル姉ちゃんよつずつとおつかれおつかれぱいだつた
ぶつ叩いたのは言つまでもない。

「あだだ……なんかねえ、記憶喪失らしさよ」

「あ?」

「だからね、記憶喪失。自分の名前以外はゼーんぶ覚えてないんだ
つて

うそ臭いことこの上ないが、どうも本当らしい。名前だけは覚え
つて
いて春日井弥生といふ。

ま、いいや。韓流ドラマじやよくあるみたいだしな。うん。

滝川はすぐに春日井のことなどどうでもよくなつた。とつあえず
無害みたいだし、自分の休みを邪魔するふうでもない。春日井は一
日のほとんどを民宿一階のリビングにあるソファに座つて、お上品
に読書をしているだけなのだ。

そう、春日井のことなんて気にするときではないのだ。

田下のところ『この休みがいつまで続くのか、いつまで続けるの
か』というのが問題なのだった。滝川はその問題を先送りし続け、
本日六月二十五日、土曜日の朝を迎えたのだった。

といあえず今日も生きてるみたいねー

おはよー、あたし。

滝川はむくりと起き上がり、徘徊老人のよつによたよた歩いて部屋のドアを開ける。ドアを開けてすぐのところに、盆に載った朝食が置いてあった。

これはこの民宿のよく言えれば特徴、悪く言えれば雑な仕事である。二食付きではあるが、食事はこのよつにて廊下の床に置かれる。客の扱いがまるで引き籠もりである。

滝川は食事を平らげ盆はそのまま机の上に置いておく。本当は一階のダイニングにある流しまで運ばなくてはならないのだが、どうせ新が掃除しに来たときにも適当に片付けてくれるのだ。

顔を洗い寝癖を直し、ジーンズとTシャツに着替えて準備完了。

化粧？ しねーよ。

会社員時代には考えられない身軽な装備である。

と、ドアがノックされ「滝川さん」と新が呼ぶ。もちろん無視した。呼び方がなっちゃいない。滝川はドアの前にスタンバつて新が正しく自分を呼称するのを待つ。

「……クリスティルさん」

若干の躊躇が感じられたがあまり格にしてやううと、滝川はドアを開ける。

「よー、青少年」

せっかく合格にしてやつたのに、新はあまり元気じやなさそうだった。若いのにいかんねー。

掃除だなんだと新がうるそく言つので、滝川は仕方なく財布と携帯をジーンズのポケットに突つ込み腕時計をはめる。 おつといけねー、手帳も持つていかねば。

手帳はちょっとサイズが大きいかさばつたが、無理やり尻ポケットにねじこむ。ついでに新を自分なりに励ましてから一階に降りる。

一階には春日井弥生がソファに座つて文庫本を読んでいた。本を読む眼差しは非常に鋭く、いつもの上品な雰囲気とは違つた。

そんなに面白い本読んでんの？

滝川の視線に気付いたのか、春日井はビクツとし、なんとも奇妙な笑みを浮かべ会釈した。滝川も僅かに首を曲げただけの会釈を返しておいた。それからプラプラと玄関から外に出た。ウッドデッキのテーブル席で、主の紀伊介がぼんやりと煙草を吸つている。

「おはー、ジジイ。とりあえず今日も生きてるみたいねー」

滝川がけしからん挨拶をすると、紀伊介が何やらおいでおいでと手招きしてくる。白髪のロン毛をポニー・テールにして、つりサングラスをかけた佇まいも手伝つて、その挙動は不審極まりない。でも滝川はまったく意に返さず平然と近づき、向かい側の席に腰を下ろした。

紀伊介は煙草を勧める。滝川は遠慮なく一本もらつて吸つた。一本吸つた。結局三本灰にした。

「ここは気に入つたか？」

紀伊介が訊いてきた。

「うん、まあね。ただ隣のガキがあたしに対して敬意がなさ過ぎるのが不満といえば不満だね」

隣のガキとは久野一太 クノイチのことだ。

「あのガキに敬意を求めるんぞ愚の骨頂。むしろ目線を合わせて遊ぶほうがいいぞい。まあ、あんたはそんなこと意識せんでも目線は同じだがな」

「なんだと？」

「反応があのガキと全く同じじや」

「……」

「まあ、あのガキはガキで色々と思つてることがある。あんたみたいな姉代わりがいると助かる。新は学校や受験勉強があるからのう」「あたしだって」

「あんたはなんもなかろうが」

「ジジイ、なかなかキツイことズバズバ言ひつねー……」

ふと民宿の中から視線を感じ、滝川は振り向く。けれど誰も自分を見ていなかつた。窓からリビングの様子が窺えるが、ソファに座つて読書中の春日井弥生の後頭部が見えるだけだつた。

おかしいなあ、たしかに見られてる気がしたのに。

「あ、そうだジジイ。この辺にリサイクルショップつてない?」

「リサイクルショップ? 古道具屋ならあるぞい」

「そこつて買い取りやつてんの?」

「やつとるやつとる」

「オーケーオーケー」

「む、もしや金がねえとか言つんじゃなかろうな。宿賃は払つてくれねえと困るぞ」

「ちげーよクソジジイ。生きたまま火葬場に放り込むぞ。そつじやなくて、不用品があんだけ捨てるのは勿体無いから売つちまおうかなーつて思つてさ」

「だつたらワシによいせ」

「だつたら金よこせ。そしたらくれてやんよ」

酷い会話だがご丁承していただけないと幸いである。なにせ二つの人の会話は、今ではすっかりこれがデフォルトになつてしまつたのだ。

大人つて何なの？

古道具屋の名前はコンドウ、コンドウ。近いの「近」に任天堂の「堂」で近堂……。

滝川は頭の中でそんなふうに暗証しながら、紀伊介に教えてもらった古道具屋に向かうべく、海沿いを延々と走る国道の歩道を歩いている。赤い彗星号に乗らないのはダイエットのため、というのはここだけの秘密だ。だが早くも疲れ始め自転車を使用しなかつたことを後悔する。

腕時計をちらりと見やる。時間を見たんじゃなくて、腕時計そのものを睨んだ。もういらない、こんなもん。

天気は快晴、けれどとにかく蒸し暑い。歩き始めてまだ十分ぐらいしか経っていないのに、早くもTシャツが汗で肌に張り付いている。いやーん透けてブラが見えちゃうわー。

誰も見ていなかった。

ほろ苦い寂しさを感じつつ歩みを進めていると、前方二十五メートルほど先に三人の少年少女たちの姿を認めた。少女は二人でどちらも中学生ぐらい。私服なのは、今日が土曜日で休みだからなのだろう。

もう一人は、今や滝川にとつて親友にして相棒にして弟分になつたつある久野一太ことクノイチだつた。

「へいへい、オネーチャンたち、おれが泊まってるホテルに遊びに来ないかい？ ゴージャスで有名人御用達、キングサイズのベッドもあるぜい！」

嘘八百じやねーか。そもそもホテルじやなくて民宿だし。

クノイチの果敢で嘘まみれのナンパは大方の予想を裏切ることなく失敗、女子中学生二人に「阿呆」とバカにされ笑われてしまった。女子一人は何事も無かつたかのように楽しそうにおしゃべりをしながら去つていく。

つたくクノイチは。どうしてあんな阿呆なナンパしかできなかなあ。

滝川は溜息をつき、肩を落としているクノイチに近づき、声をかけた。

「おはー、クノイチ」

「おははははは……」

クノイチは壊れかけだつた。心神喪失中らしい。

「どうしたんクノイチ、ナンパしくつたぐらいで氣落とすなつて。何度もナンパしていくうちにきっと成功するよ」

滝川はクノイチの頭をぽんぽんしながら言った。

「うん……そうだな。うん、そうだそうだ」

「そうだそうだそうなのだ」

便乗する滝川。恐ろしく適當なテンションである。

「うん、俺もよくわかんないけどそう思うのだ」

とりあえずクノイチは元気を出してくれたようだ。「けどさー、大人はスゲーよなー。ナンパなんか簡単に成功させちゃうんだもん」「んー、それは違うぞクノイチ。大人だからってナンパが上手いとは限らないよ」

「えつ

「大人の中にだつてナンパの上手いヤツもいれば下手なヤツだつているよ。ナンパすらしたこともないヤツだつているよん」

「……じゃあ、大人つて何?」

「クノイチ?」

クノイチの様子がおかしいことに、滝川は気付いた。クノイチは拳を握り締め、肩を小さく震わせている。泣きそうなのか、悔しいからなのか、それとも両方なのか。判然としない。

「大人つて何なの? ねえクリスタル姉、教えてよつ!」

いつもなら「クリステルだ」と訂正を入れるところだけど、滝川はクノイチの剣幕に二の句がつげない。まるで食い殺す勢いで、滝川に迫つているからだ。

滝川は頭をフル回転させて必死に考える。

大人大人大人……これまで関わったたくさんの大人の顔が思い浮かぶ。でも、答えは一向に出てこない。自分のことを考えてみる。余計わからなくなつた。

大人つて……何だろ。あたしが訊きたいよ。福岡あたりにさ。

気迫といふか希薄な存在になりたいです

入社して間もない頃、滝川は新入社員歓迎会に出席した。出席といつても会社内にバーを完備しているので、歓迎会もそこで行われた。シェフが呼ばれ、豪華な料理と酒が次々と運ばれてくる。

滝川は新入社員の洗礼を受けていたので、料理を味合ひ二三うどはなかつたが。

上司の酒を注ぎ、料理を運び、つまらない冗談を一億倍ぐらいうおもしろく脳みそに暗示をかけて笑う。同期の子たちも同じよつこくくるくる動いていた。

現実味ないねえ……。

それが滝川の感想だつた。

会社に洒落たバーがあつてフランスだかイタリアだか知らないけどシェフを呼んじやつたりして、この不景気な世の中においてこんなに浮かれている会社は珍しい。全社員五十人と、規模は小さいが勢いに乗つていた。

そんな環境のせいもあつてか先輩や上司たちは『高い物はいいものだ』と連呼し、『借金はどんどんしよう』と吠え、阿呆みたいに高いブランド物のスーツに身を包んでいた。

滝川が今身に着けている腕時計、それに尻ポケットに突っ込まれ無残な形に変形しつつある皮製の手帳は当時買ったものだ。時計はロレックスを中古で二十万、手帳は五万かかった。それでも会社の人たちが使つているものに比べたら安かつたらしくけど。今考えるとなんて馬鹿馬鹿しい買い物をしたんだと思う。身の丈に合つていないというか、キャラにあつていなアイテムだなど滝川は思つている。

会社内の新入社員歓迎会が終わると、自然な流れで二次会へと移行、するはずだった。滝川もそうだと思っていた。

けれど、そう思つていなかつた人がいた。滝川の同期たちだつた。

「あ、すいません。時間も遅いんでお先失礼しまーす」「僕も」「

私も」

どんどん帰つていく同期たち、そしてついには滝川一人が残された。

空氣読めよ……。あたしだつて帰りたいのに……。

滝川は啞然としつつ、その場に残つて二次会に新入社員单独で出席した。

洗礼は滝川一人に集中した。とくに当たりがきつかつたのが直属の上司、福岡靖男だつた。居酒屋へ移動する間も二次会が始まつてからも、滝川は福岡になじられた。

「二次会が誰のためにあんのかわかつてんのかよ?」

「ごもつともです。そして頭部をぴしゃりと叩かれた。痛いです。

「おめーらのためだろ? ああ?」

仰るとおりです。そして頭部をぴしゃりと叩かれた。痛いです。恐いです。

福岡は三十過ぎの妻子持ちらしい(こんな男がお父さんじゃなくてよかつた)。ゴルフ焼けした黒い肌に体つきはゴーレムの如くがつちりしていて、滝川としてはできる限り接触したくない人柄の筆頭だつた。

が、彼女は完全にロックオンされてしまつた。

それからというもの、滝川は事あるごとに福岡に叱られ怒鳴られ罵られた。その間、なぜか同期の人間は一人一人と会社から去つていつた。

なんだよー。お前らいつたい何が不満なんだよー。あたしが全部不満受け止める感じじゃんかよー……。

ある日、福岡はこんなことを言つていた。

「なあ滝川、こんなこと言いたかないけどよー」
「じゃあ言わなければいい。」

「お前、覇気がねーよ。覇気が。辞めてつた奴等もそつだ。競争し

て年収ガンガン上げてくれには周りのヤツを潰すべりこの気迫が欲しいわけよ。切磋琢磨ってやつ?」

「**霸氣**がなくてすみません。吐き戻ならあります。気迫といふか希薄な存在になりたいです。」

もううん思つても言わなかつた。

……わかんないつちや

「クリスタル姉、大人ってどうすりゃなれるの！」

クノイチの声で、滝川は我に返った。

「いけねーいけねー。黒歴史を思い出しちまつたわ。でも、結局大人ってなんだろう。福岡理論でいくと『覇氣があつて競争に打ち勝つてガンガン年収上げていく』という条件を満たせば大人、といふことになりそうだ。

「納得いかねー。認めたくねー。」

「……わかんないつちや」

滝川は小さく呟いたが、クノイチは聞き逃さなかつた。

「えつ！？ だつてクリスタル姉、大人なんだろ！？」

「痛いとこつくなークノイチ。」

「たぶん」

「えーなんだよそれー、意味わかんねー」

「あたしだつて意味わかんねーよ」

「なんだそりゃ」

「まあ、わかつたら教えてやるぜい」

クノイチは「むむむ」と円周率を覚えるのに苦戦する小学生みたいな顔をしている。あれ、今は円周率つて3なんだつけか。わからん。ジエネレーションギャップをひしひしと感じる今日この頃。

「……約束だぞ」

クノイチは滝川をじつと見て言つた。 そんなにじつと見ないでおくれ。予防線張りづらいぜ。「女に一言はない」かつこええ言葉で締めてみる滝川だった。

「はあ……」

「いつちよまえに溜息なんかついて、一億年早いぞ少年」

「クリスタル姉のせいだ」

「あたしのことはクリステルと呼びな」

「クリステル姉のせいだ」

「もう、しゃあないなー」

滝川は時計をあげるか手帳をあげるかで一瞬迷ったが、時計のほうが高く売れそうな気がしたので、手帳をあげることにした。

「クノイチ、お前にこれを授けよう」

「お？…………こ、これは！？」

「ふふふ、驚いたか」

「これ、何？」

「……」

手帳は大人のアイテムだと説明すると、クノイチは飛びようにして喜んだ。

その後、駄菓子屋でクノイチにアイスを奢つたりくじ引きで本気の一喜一憂をして、滝川は宿に戻った。古道具屋に行き忘れたことに気付いたのは、自分の部屋で鏡を見ているときだった。

馬子にも衣装つて感じだなあ

その日の夜。

滝川は自分の部屋の鏡で、己の顔を凝視していた。童顔でふわふわぽわぽわした感じの女子がそこには映っていた。本当に大人のかと首をひねってしまう。

どうしてあんたはクリステルじゃないんだ？ なんで花子なんだ？

クリステルならきっとこの時計も似合つし、あの手帳だつてしつくりくるだろう。あの手帳のページを繰つてスケジュールを確認するクリステルというだけで、絵になるし様になる。でもあたしはどうだ？ 福岡にバカにされて叩かれるのが落ちだ。

それか……元カレに笑われるか。

「成川くん、元気かなあ」

「ぎやはやははっ、なんだよお前それー。馬子にも衣装つて感じだなあ

「あははは

会社員生活がスタートしてから最初のデートの日、滝川は成川修^{なりかわ おさむ}に爆笑された。成川は大学のゼミで一緒にになり、一年生からずっと付き合っていた彼氏、だった（過去形を強調）。

仕事帰りに飲みに行こうということになり、スーツのまま駆せ参じた結果がこのザマだった。滝川としては自信があった。ビシッとしたあたしを見ておくれ、といわんばかりに。ちなみに成川は普通にスーツ and ネクタイ姿だった。悔しいけど似合つていた。

「なんつーかさー、お前はいつものスポーティーな感じがいいと思うよ

「あははは

普段の滝川はジーンズ・ジャージ、トップスは夏はTシャツ、冬になるとその上にジャージの上着を着ていた。スポーティーとうか、普通に部屋着だった。動きやすい格好が滝川は好きなのである。

「つーかなんだよそのヒール」「あははは」「高そつだなーその時計、巻く腕間違ってるくさいけど」「あははは」しばくぞゴラア！お前こそなんだ、趣味の悪いスポーツカー乗つてんだろうがつ。休日になると海沿いの道をぐるぐると飽きもせず走つて何が楽しいんだ。嫌なことがあると物凄いスピードでぐるぐると走つて気分爽快つて阿呆か！しかも実は隠れオタで『花子には俺の秘密を見せる』なーんて重々しい口調で言うから何かと思えば美少女フィギュアの群れでそのくせ乗つてる車にアニメ的な外装を施すんだから隠れてんのか堂々としてんのかわかんねーよ！

……とは、思つても言わないでおいた。

どうしてそんな彼氏と付き合つっていたのか、自分でもよくわからぬ。学生時代は楽しかったんだけどね。

ただ、成川の車趣味のおかげで、滝川は自転車で砂浜に辿り着くことができたのだ。

民宿熊島の近くを通る国道はきれいな橿円形の形をしていて、サーキットのような趣をかもし出している。実際、夏の夜なんかは走り屋たちがブオンブオン愛車を走らせる。成川もそんな走り屋たちの一人で、滝川はよく車の助手席に乗つてお供していた。

「いやあ笑つた笑つた。やっぱ花子って最高だよ」

「あははは」

おめーは最低だよ。

そのデートの帰り道、滝川は別れのメールを送った。

おっと、いかん。またも黒歴史がフラッショバック。
滝川は自分の顔面を凝視したまま、意識をぶつ飛ばせていた。時

間にすると十分ほどだつたようだ。物凄く時間の無駄遣いをした気がして、気が滅入る。

「成川のアホー」

独り言を呟いてみる。 鏡の中のび、美……美人さんも怒っちゃつてゐるぞー……はあ。

『美人さん』と発音することに躊躇した自分が情けなくなる滝川である。

「わたしはクリステル。滝川クリステル」

今度ははつきりと発音する。やはり鏡の中の美人さん（躊躇しない）は同じように口を動かす。けれど。

鏡に映っているのはジャージ上下を着た女子だった。どう好意的に見ても滝川クリステルではない。そして不覚にも、似合つてゐる、と思つてしまふ滝川だった。

ジジイ、今日の朝ごはんがカップ麺だつたんだけど

おはー、あたす。

地方在住の祖母風一人称を用いて朝のご挨拶をしてみた。

六月二十六日、日曜日、午前八時。滝川はベッドの上からメモリ不足のPCのように起動した。ねみー。

ゾンビのようによるよろ移動してドアを開ける。今日のごはんはナニかなーと、廊下の床を見て、滝川はぎょっとした。カップ麺が置いてあるだけだった。盆にも載つておらず、床に直置きである。

ついにここまで手抜きするようになったのか……。

斬新過ぎる食事に驚愕と落胆と憤りを感じつつ、滝川は部屋の中で麺を啜る。窓から朝日が差し込み、波の音が聞こえてくる。朝ごはんはともかく、海の朝は良いね。うん。

カップ麺を食べ終えた滝川は、昨日と同じく財布携帯腕時計セットを装備。昨日は結局クノイチを励ます会（たつた今命名）があつて古道具屋に行くのをすっかり忘れてしまった。

この時計、いくらで売れるかなあ。おつといけねー、ジジイに文句を言わねば。いくらなんでも今日の朝ごはんはあんまりだ。滝川が一階に降りると、紀伊介はダイニングのテーブル席に座っていた。たしか民宿の人はここでメシを食つてるとかクノイチが言つてたな、と思い出す滝川。

紀伊介だけでなく、春日井も座つている。一人は何やら小声で話しあつているところだった。紀伊介はいつものようにサングラスをかけているのでわからないが、春日井の表情は引き締まつていて緊迫感に満ち溢れていた、が、滝川が現れるとまたいつものおつとり上品な表情に戻つた。

「おはようございます、クリステルさん」

春日井はぺこりとお辞儀した。胸がふるんと震える　つて、なしてパジャマなの？

「おはよー」¹⁾ざます

とりあえず挨拶しておいた。

川は春日井のパジャマを凝視した。薄いピンク色の花柄のパジャマだった。胸元のボタンは二つ解放され、魅惑の谷間が外界に晒されている。

「おいこりゃ、ワシにも挨拶せいや

「あ?」

そうだった。ジジイに文句を言わねば。

「ジジイ、今日の朝²⁾」はんがカツプ麺だったんだけど

滝川は言った。

「うむ。若者を意識して作ったのじや」

「ミクロも悪びれずに紀伊介は言った。

「ぬわにが若者を意識した、だよ。朝飯がカツプ麺なんて有り得ね

ー

「せっかくワシが腕によりをかけて作ったもんに、なんちゅーこと
を言つ娘じや」

「腕により? 阿呆か。 つて、あれ? 新は? いないの?」

そう、普段なら新が食事を作っている。といふかこの民宿の仕事全般を新が担っている。

「あーっと……ちと、あれじや、風邪を引いてのう」

「はーん」

紀伊介の言い方は歯切れが悪いことにこの上なかつたが、滝川は全然気付いていなかつた。

風邪ならしがないか。カツプ麺、好きだしね。うん。

あたしのマフに指一本触れるんじゃなによ

わつてとー、今日こそ腕時計売つぱりつぜー。ええと古道具屋の名前はなんだっけ……。ゲンドウ、ガンドウ、コンドウ? つーん『なんぢやらだ』だったことは覚えてるんだけどなー。蜃氣楼よりおぼろげな記憶を頼りに、滝川は民宿を出て、愛車『赤い彗星号』に乗ろうとする、が、なかつた。ありや。

民宿の玄関を出すぐ目の前に停めてある。いつもならクノイチが乗ってるのかもしれない。新は風邪で寝込んでいるらしいし、紀伊介も春日井も民宿の中に入る。でもクノイチの姿はまだ見てない。ていうかクノイチはいつも朝飯食つたらすぐに外に遊びに行くしな。でもサドルをマックス下げても厳しいんじやないか? ま、いいや。

滝川は歩いていくことにする。

浜辺から階段を上つて国道へと出る。遠くの景色がゆらめいていふ。もはや景色は真夏のそれである。まだ六月だといふのよ。

うー、六月の景色じやねー。八月になつたら五十度とかいきそうだね。

出発早々滅入つた気分はその後一十分ほど続いた。紀伊介に教わった古道具屋まであと五分ほどで着く、といつところど、見たことのある赤い自転車と見たことのある派手なスポーツカー、それに見たことのある民宿に泊まり続けるホームアローン少年と見たことのある元カレを視認した。

どういづカラボだよ……。

クノイチと成川が、国道沿いの歩道で向かい合つて何やら口論を展開していた。……いや、成川が一方的に怒鳴つているらしい。顔を猿の尻みたに赤くして唾を飛ばしながら吠えている。

クノイチは歯を食いしばつてそれに耐えている。赤い彗星号はクノイチが支えている。

クノイチと成川の後ろ斜め後方、海岸を田の前にした位置には営の有料駐車場があり、イタ車が停めてあつた。『イタリア製の車』ではないということを言及しておく。痛車である。見た田はスポーツカーだが、真っ赤なボディにはアニメ絵美少女がボンネットや両サイドのドアにでかでかと描かれている。遠くからでも一目でわかつてしまふ。できれば蜃気楼であつてくれと滝川は思った。

「あ、花子つ！」

成川がこちらに気付いた。紺色のポロシャツにビンテージ物の色褪せたジーンズ姿だった。私服になるとまだ学生っぽかった。

ヤマトノシテ

「お前、ひやッせ……やあじゅねえよ」成川はライラクしたふうに頭をかきむしる。「でもやつぱいの辺にいたかー。お前、こいつに入つてたからな」

あははは

殴りでしょ。元カレに『お前』呼ばねえやれるとか云は
も腹立つのかしらん。

「盜
まれ
?」

「うこりやだひじる」

所川は夕べ元を打差していか
この夕

何もしやべらねえんだ。怪しい二たらない世

なるほど。そういうことね。成川はクノイチが赤い彗星号に乗っているところを見かけて止めさせたんだな。なんといういらぬ偶然。

偶然

「どうだかな」

「本当にうれしいです。おまかせください。」

「クッ」と無言で小さく頷くクノイチ。

元気のなさは、大体いつものコイツなら成川に言われるがままなんて不自然だぞ。何がしかの反抗的態度、あるいは直接的な反撃やらで挑むほうが自然なんだけど。

「まあこんなガキはどうでもいい。花子、帰るぞ」

「……え？ 帰る？」滝川は首をもげるぐらいひねる。「もしかしてあたしを連れて帰るためにここに？」

「当たり前だろ。ほかに何があるっていうんだよ。お母さんから聞いたぞ。花子がいなくなつちまつたてな。会社からばつくれるは上司に電話で暴言吐くはそのまま行方くらますは、まったく、大人のすることじやねえだろ」

ぐはっ、んなことまで知られているとは……。そういえばオカンには成川くんと別れたとは一言も言つてなかつたな。やれやれ……こういうとき家族公認カッフルの面倒臭さを痛感するなあ。

そのとき、沈黙していたクノイチが突然声を荒げる。

「クリスティル姉は大人だつ！」

「く、クノイチ？」

滝川はびっくりして心臓がテンエイティーしてしまつたかと思つた。見ればクノイチ、涙目になつて成川を睨んでいる。その表情は昨日ナンパに失敗したクノイチの顔を髪髷とさせる。まだ昨日のナンパ失敗を引きずつているのだろうか。

違う。そんなんじやない。何か、何か地雷があつたんだ。クノイチを爆発させるだけの地雷を、成川くんが踏んだんだ。
けれど、滝川にはその地雷の在り処はわからない。

「クリスティル姉は大人だ！」

クノイチはもう一度叫ぶと、成川にどびかかつた。突然のクノイチ暴走に、成川は目を見張るだけでクノイチの出鱈目に繰り出されるパンチやキックをまともに食らうが。

いくらなんでも大人の成川にクノイチが敵うはずがない。ボコボコにされて怪我するんじや……と心配した滝川だったが、よく見れば既にクノイチはそこかしこを擦り剥き、痣を作つていた。

どういふこと？ まさかあたしが来る前に成川くんにやられたとか！？」

「くつ、なんだよこのクソガキがっ！」

「離れろ！」

成川もようやく事態を把握し、クノイチ撃退に移行する。クノイチは頭部を成川の手に押さえつけられながらも、がむしゃらに両腕を振り回している。

「テメエこそクリスタル姉から離れる！ おれの女に手出すんじゃないぜつ！」

「バカかこのガキは！」

……クノイチ。

もみ合う二人を見ながら、大人つて本当に何だろ、と滝川は考える。

大人つて言つても色々いる。ナンパの上手いヤツ、ナンパの下手なヤツ、ガキみたいな大人、大人みたいな大人。

成川くんは……大人？

……大人かもしれない。でも……あたしとは違う大人だ。

そして。

滝川は二人のもみ合いに割つて入り、成川の顔を殴打した。平手打ちではなく、グーで、殴打した。手の甲が軋む感覚と、成川の左頬が潰れる感触が同時に襲つてくる。 いつてー、けどすつきりー。

成川は殴られた頬をおさえふるふると震え、ぽたぽたと鼻から血を流し始めている。終いには涙さえ浮かべる。クノイチはとくに、きょとんとした様子で未だに何が起こったのかよくわかつていな様子だ。

「な……なに……するんだよ」

成川は呻くように言う。

「失せる成川。あたしのマブに指一本触れるんじゃないぜ」

「くーつ！ おふくろにも叩かれたことなんてないのにー！」

成川は泣き喚きながら県営駐車場に逃亡、駐車してあつた痛車に

乗つて去つていった。やかましいエンジン音が波の音を一瞬かき消したが、すぐにまた穏やかな潮騒がその場を埋める。逃げていく成川の後姿は、どう好意的に見ても大人には見えなかつた。

十分遅れどるよ

滝川とクノイチはその足で古道具屋に向かった。道中、滝川は首を傾げた。クノイチの体の傷、それに赤い彗星号がヒュウヒュウ凹んだり傷ついているのだ。車輪が回転するたびにガラガラと奇妙な音まで立てている。ここまでボロかつたかな、と思う。

成川め。クノイチをイジメやがつたうえに赤い彗星号にまで……おのれ。正拳突きでもかましておけばよかつたぜい。できないけど。つてありや、あたしはこんな凶暴な女子だったかしらん。なにはともあれ古道具屋にホールイン。古道具屋の名前は『近堂』だった。

古い商店街の中の一角に店を構えていて、様々な商品が所狭しと並んでいた。テレビからエアコン、冷蔵庫などの電化製品から巨大な招き猫やウクレレ、百科事典、たんす、卓袱台、カツラ、竹刀、兜、藁人形……ぱっと目についたものを擧げてみるがキリがないのでやめる。まあ、「ミニ屋敷と僅差、といつた佇まいである。その混沌とした空間の中で、主らしきおばあさんは丸椅子に座り、ノートパソコンの画面を眺めてマウスをかちかちしていた。意外とデジタル通なおばあさんなのかもしれない。

滝川が「貰い取りなんですか」と軽い口調で、おばあさんは顔をLEDばかりに明るくして「こりつせーこりつせー」と奇怪な挨拶を寄りしげてきた。

「……これなんですか？」

滝川はおばあさんに腕時計を差し出す。おばあさんは老眼鏡をくいくいと指で持ち上げ位置を調整、腕時計を受け取り鑑定を開始した直後、鑑定は終了した。

「五百円だーね」

店主のおばあさんはあつわつと言った。

「ええー? おばあちゃん、そりゃいくらなんでも安くさだよつ

！ ロレックスだよ！？

「ロリックス？」

「そんな幼女好きみたいな名前じゃねえ！」

「本来は二千五百円で買い取るところなんじゃがねー」 本来的な買取値がそもそも安い。「これを見てみい」

「どれ？」

おばあさんはすずいと腕時計を滝川の眼球のまん前に近寄せる。ふーむ、きれいな時計である。どこにも欠点は見当たらないように見える。

「十分遅れどるよ

「……」

十分遅れてるから千円引かれたらしい。 意味わからん。 なんてこつたい。

しかし、滝川はその値段で納得していた。実はそんなに価値があるものだとは思っていなかつた。持つていても虚しいだけの代物だ。大体、見る人や見る場所、見る大人が変われば、価値なんてこじろ変わってしまうんだ。

うん、そう。

いくらでも、変わっちまうんだ。変わつていけるんだ。

さて、あたしはどんな大人になるうか。とりあえずクリスチル級のすげー大人になつてやる。

いつかクノイチに、大人になる方法を教えないといね。

滝川はおばあさんから千五百円を受け取る。

はんぺん

古道具屋からの帰り道も、クノイチはプール開きに雨に降られた小学生みたいに元気がなかつた。ついさつき成川とやりあつた地点を過ぎ、とぼとぼと『民宿熊島』へと続く海岸沿いの国道の歩道を進む。

潮風がぶあつと吹き、前方十三メートルほど先にいる女子大生風の女子一人のスカートがめくれる。内部構造がしっかりと視認できるほどに。

しかし、まことに信じられないことに、クノイチは全く動じなかつた。

重症だ……。

滝川は事態の重さに改めて気付く。そこまで成川にコテンパンにやられてしまつたのだろうか。

仕方ないなー。今日は特別、『褒美だゾ。

「クノイチ」

「ん」

「おっぱい揉ませてあげよっか

「えっ！ いいのー？」

それでこそクノイチだぜ。

「おうおう。どーんとこいや

滝川は胸を張る。通行人の痛い視線は心の壁でガードする。

「で、ではオトコバに甘えて」

知らない言葉を無理に使いたいお年頃だということで、今回はスルーしておく滝川。ちなみに言つまでも無いが『お言葉に甘えて』です。

クノイチの両手がすっと滝川の胸を鷲掴みにする。 む、躊躇が無いなコイツ。

そして天然バイブレーション的動作に移行、滝川の左右の乳がふ

にふにとまれる。うおーぐぐに乳揉まれたーよー。

「どーよ、あたしのパイオッは」

クノイチに訊くと、手をぱっと離し、惱みだしてしまつ。そんなに難しいことを訊いただろうか。

「例えて言つなら」

「例えて言つなら?」

「はんぺん」

クノイチの頭部に手刀を叩き込んだのはいつまでもない。

202号室の掃除

201号室 滝川の部屋の掃除が終わり、続いてお隣の202号室を掃除しようと、新はドアをノックする。しかし無反応。でもまあ、これはいつものこと。ドアを開けてみると、案の定誰もいない。久野一太 クノイチは外に遊びに行つたのだ。

部屋の中を見渡す新。とにかく散らかっている。ゲームソフトはプレイ済み未プレイ問わず床に山積みにされ、ゲーム機は据え置き型が三台（もちろんそれぞれ違う機種）、携帯ゲーム機が一台（これはなぜか同じ）。それと漫画の数も半端ではない。いつの間に買ったのか部屋の隅に三段のカラーBOXが置いてあり、全ての段に隙間なく漫画が詰まっている。

なんかどんどん増えてるような気もするなあ。

新はぼんやりとそう思う。新はゲームや漫画にはあまり興味はない。ここに来る前 小学校四年まではかなり入れ込んでいたが。ひとまず窓を開け放ち空気の入れ替えをする。外を窺うと、まず紀伊介と滝川がウッドデッキのテーブル席で話しているのが見える。二人とも煙草の煙をもくもくと立ち上らせ、周囲を煙たくしている。浜辺のほうに視線を移すと、天羽今日子あまはきょうじが浜辺を歩いているのが見える。真っ白いワンピースに麦藁帽子をかぶっているその姿は、浜辺の美少女のあるべき姿を具現化したものと言つても差し支えない。案の定、まるで餌に釣られた魚のように、一人の男が近寄つて声をかける。無視されている。どこかのナンパ少年のように肩を落としている。

ていうか今日子……何をしてるんだろ。

今日子は民宿熊島のほうを見ては視線を逸らしうつろうつろし、また民宿を見やつては視線を外す、なんてことを繰り返している。なんだか拳動不審だ。

どうしよう……会いに行きたい……けど、いったいどんな顔

して会えぱいいんだるつ……。僕だつて……東京に……。やめよつ、今は掃除だ。この民宿が僕にとつては全てなんだ。

新は今日子にロツクオンしていた視線を引き剥がし、別の方へと向ける。

拳動不審といえは、そこから少し離れたところにいるアフロ頭の少年二人も不審だ。彼らは海で波に乗つてゐるサーファーに目を向けていた。双眼鏡越しに。サーファーに憧れていのだらうか。それにしてはなんだか監視の目を向けているよう見えなくもない。

あのアフロ頭の子たちはクノイチの同級生じやなかつたつけ。氷で薄まつたコーラみたいな記憶を抽出してみるが、はつきりした回答は導き出せなかつた。

「さて、と」

窓から見える景色から、ゲーム漫画天国へと視線を移す。「掃除、するかな」

だが、フランクばかりだった

*

最近、学校でコイバナというのが流行つてゐる。恋のお話、らしい。恋バナ？ って書くのかな。

とにかくそのコイバナとやらは男子と女子の枠を超えてクラス内でひそひそと囁かれているのだ。

くんは**ちゃんのことが好き。××くんは さんのことが好き。¥¥くんは\$¥くんのことが好き（一応可能性はあるやもしけぬので入れてみた） というのとはまたちょっと違つ。なんというか、もっと深いのだ。エッチなのだ。

クノイチにとって学校は第一の遊び場みたいなものだ。勉強は面倒だが遊びは良い。仲の良い友達もいる。嫌なやつもいるけど。例えばアフロ兄弟の鉄平と銅平とか。例えばといふか、その一人しかいないけど。

アフロ兄弟こと鉄平と銅平は、双子の兄弟だ。そのあだ名が指すとおり、アフロ兄弟の頭はアフロ頭、のように見える。実は癖毛だ。でもぐりんぐりんにカールしていて、しかも質感が若干チリチリしているところが実にアフロ的で、初対面だろうと癖毛という真実を知っている彼らの母親でさえも『アフロだーねー』という感想しか抱かない。

そのアフロ兄弟がナンパに成功したのは、もうかれこれ二ヶ月のことだ。女子中学生のナンパに成功したのだ。

アフロ兄弟はかなり大人っぽく見える。背も高い。中学一年生となら渡り合えるぐらいに大人だ。彼らのナンパの成功は男子の中では話題どころか伝説にさえなりつつあった。そしていつのまにか『ナンパの成功』大人への階段』というわけのわからぬ図式までが当たり前になってしまった。ここ最近のコイバナのエッチ化の原因は

ここにあると見てまず間違いない。

クノイチは背が低い。子供っぽい。アフロ兄弟にことある「」とにかくにされていたが、ここにきてナンパ成功を収め増長している彼らに、ガキだガキだとさらにバカにされているクノイチだった。クノイチは自分も大人になるべくナンパに挑戦することを決意、付近の女子に声をかけるようになった。だが、フラれてばかりだった。

小学五年、独身

この日も、クノイチはフラれてばかりだった。

ゴールデンウィークが明けて二日目、平日の砂浜にはほとんどいなかつた。犬を散歩しているおばさんがいるけど、年の差推定四十歳を克服するだけの愛と勇気と諦めなんか持ち合わせちゃいない。ゴールデンウィーク中は海を見物しに来る旅行者でそれなりに賑わっていたけど、そのときのクノイチの戦績もやはり全く振るわなかつた。

うむむむ、何が間違つてんだ？　つーか間違いとか正しいとかあるもんなの？

クノイチの心の問いに答える人間はない。一瞬、プライドをかなぐり捨ててアフロ兄弟にどうやつてナンパに成功したのか教えてもらおうかと思ったけど、そんなことするぐらいなら新に一ちゃんの掃除の手伝いでもしたほうがマシだ、とクノイチは思つてその考えを打ち消した。

あーあ……おお？

意氣消沈の体で浜辺をプラプラしていると、浜辺に寝そべつている女がいた。女の横には赤い自転車が倒れている。大人だろうか。それにしては子供っぽい顔だなあ、とクノイチは思った。それに大人が浜辺に大の字になつて、それもピシッとしたお葬式みたいな格好して砂の上に寝てるなんてありえねー。でも、ちゃんとす。今度こそと気合をいれ、クノイチは突撃する。

おれはイケメン、おれはイケメン。

自分に強い暗示をかけるクノイチ。大丈夫、もうどうやつて声をかけるか決めている。今までちょっと紳士っぽかったな。今度は爽やかにいくぜい。

「へい、ネーチャン。添い寝してあげよーかい？」

「少年、ナンパの仕方がなつていなーぜ」

「えつ」

考えた決め台詞の中でもとびきりイカしてるのを選んだのに！？

まさかの展開に（あくまでも本人的に）焦るクノイチは、誰にも要求されていないのに軌道修正を試みる。ええとええとええと……こ、これでどーだ！

「へい、ネーチャン。おっぱい揉ませろや」「頭をぶつ叩かれた。あだだだ。

ヤケクソだつたんだよ。本当だよ。

また呆気なくフられた。いつたい何十連敗したのかわからない。そんなその他大勢の失敗に埋もれるのが常なのだが、今回の失敗はなぜかクノイチの中で失敗フォルダに入れることを強行に拒んでいる。

な、なんだろ。このネーチャン、なんか……いいなあ。

「ネーチャン、名前なんつうの？」

クノイチは訊いた。でも大の字で寝ている女は寝ているのか何も反応が無い。ただの屍じやないのかと思うほどに。　ああ、そつか。まずおれから名乗らないと失礼なんだな。よし。

「おれは久野一太つていうんだ」

クノイチは自分の名前を言つた。けれど女は瞳を閉じて誰かを想つているのか知らないがとにかく黙つたままである。　うむむむ、もう少し詳しいプロフィールが必要なのかもしれないぞ。

「あだ名はクノイチ」

あだ名を言つてみた。しかし女は目を瞑つたままだ。　もしかしておれが独り者じゃないと疑つてるのかな？

「小学五年、独身」

さらに詳しくプロフィールを語るも、女は何の反応も示さなかつた。もしやこの女人は眠り姫おれのキスを待つてゐるのかもしれぬ、と前向きに考えてみるクノイチ。でもそれじゃあ変態さんだなあ、と即座に気付けた彼は、まだ救いようがあるといえよう。

つーかこのネーチャン、ちょっと失礼だなー。

「礼儀知らずだよネーチャン。名乗られたら自分も名乗らないといけないんだよ」

女が僅かに動いた。頬をひくひくと動かし、何かを喋るとしているようだ。

「へイ、ネーチャン」

クノイチが再度声をかけると、女が小さな声で言った。「あたしは滝川」

「……する」

「お?」

何を捨てるつて?

「クリスティル……滝川クリスティルなのだ」

「おお、外人? ハーフ?」

「琉球人とアイヌ人のハーフだよ」

ハーフつづうかそれつて百パー外人だぞ! と、にわかに興奮するクノイチだった。

「よくわかんないけどスゲー。スゲーよクリスタル姉ちゃん」「クリスタル違うつつの。あたしのことはクリスティルと呼びな」

その後、

「どこから来たの?」

「トウオウキヨウツ」

「うおー外国の都市っぽーい。発音が」

「うつせー。少年、お前はどこ住んでんの? 地元の子?」

「民宿っ子」

「ナニソレ?」

「民宿にお泊りんこ」

「ほほー民宿にお泊りんこ。なるほどなるほどー。連れてけ」

そんなやり取りが交わされ、クノイチは滝川を『民宿熊島』に連れて行くことになった。滝川は『民宿熊島』に入るなり「ここにし

ばらく泊まるわー。丁重に扱えよー」と新に言つていた。

よくわからないけど、とにかく、ついに女人の人自分が自分についてきてくれた。そう思うと、クノイチは興奮せずにはいられなかつた。

それ以来、クノイチは滝川のところへちょくちょく遊びに行つてゐる。クノイチが勧めるゲームと漫画を滝川は物凄く楽しそうに手に取り、まるで同じ小学生の友達と遊んでいるようだつた。そんなわけだから、これは果たしてナンパの成功といえるのだろうか、と

クノイチは首を傾げていた。

成功かどうかわからないので、アフロ兄弟にはまだ自慢していい。

三の下に隈と皺ができるまつせい？

六月二十五日、土曜日、午前六時半。クノイチ起床。今日は学校はお休み。いえい。

休みの日、子供はなぜか早起きし、大人は昼まで惰眠を貪る。クノイチは子供の例に漏れることなく早起きで元気いっぱい。パジャマから普段着へ十七秒で着替えて滝川の部屋に行つてみるが、やはり彼女も大人の例に漏れることなく爆睡している。

仕方なく、クノイチは一人で遊びに行くことにする。まあ、いつものこと。

クノイチは他の客と違つて一階のダイニングでご飯を食べるので、階段を降りて一階に行く。リビングを突つ切つてダイニングに行こうとするクノイチの目に、巨大なおっぱいが映りこむ。男の条件反射的に急停止。春日井弥生がソファの横にある本棚の本を物色中だ。春日井は滝川が泊まり始めてから一週間ほど経つたころに、この民宿に来たおっぱいな人である。クノイチは密かに、春日井のおっぱいの体積は滝川の一億倍だと試算している。

「へイ春日井ちゃん」

「あらー太くん、おはよう」

「何してんの？」

「本を選んでるのよ。これだけあると迷うわねえ」

「字ばっか読んでると、目の下に隈と皺ができるまつせい？」

クノイチがそう言つと、春日井がギロリと睨んでくる。それは普段の春日井からは想像できんほどの鋭い視線だ。クノイチはびっくりする。でも春日井はすぐに手をぶんぶん振つてちょっと引きついた笑みを浮かべる。

「あ、やーだあたしつたらオホホホ。だめよー太くん、女性にそんなことを言つちゃ。いい？ 皺のある女性なんて、この世にはいないのよ？」

「えー、でもこないだクリスタル姉は言つてたよ。『あたしも十年後にはシワシワのババアかなー』って」

「……………」春日井はまるで石化したように沈黙する。「……それは違うのよ、一太くん。滝川さんは未来のことを予想しているにすぎないの。実際は十年後になつても、滝川さんはシワシワになつたりしないわ」

「おお、もしや春日井ちゃん、未来人?」

「未来人?」

「だつて未来のことわかんだもん。スゲー」

「そ、そうよお。大人は何でもわかるのよ、オホホホホ」

「スゲー」

「そうかー大人はなんでもわかっちまうのか。そつかそつかー、ナンパを成功させちまうわけだ。と納得するクノイチである。

「ていうかさあ、そんなの読んで楽しいの?」

クノイチは春日井が手に取つてている文庫本を見やる。背表紙は日焼けしてページは泥水で煮込んだように茶色い。 つーかタイトルすらちゃんと読めねー。

「ええ、楽しいわよ」

「ふーん、おれにはわかんねーや

「それは勿体無いわ。せつかくこれだけの書物があるのに」「リビングにはソファとガラステーブル、それに大きなテレビとテレビ台がある。いささか年季が入つていてことに目を瞑れば、それなりに見えなくもない部屋である。けれどソファの横にある本棚の存在がやけに浮いている。並ぶ本のラインナップは国内外の古典文學ばかりで、クノイチ的には病院の待合室にあるしけた本棚よりひどいと思つてゐる。

「古いつちいよね、ここの中」

「ああ、ここのご主人が若い頃に買つたものみたいよ。ご主人ね、若い頃は小説家を目指してたんですつて」

「ショーセツカつて小説を書く人?」

「そうよ」

「はーん」

おっぱいは大きいけどあまり話は面白くない春日井と少し話をしたクノイチは、ダイニングに行き用意されていた朝ごはんを一分十七秒でかき込んで、すぐに外へ遊びに行く。

ウッドデッキのテーブル席で煙草を吸っている紀伊介、それに浜辺のゴミを拾っている新が目に入る。

紀伊介に「よージジイ。まだ生きてるみたいだなー」とブラックな挨拶をかまし、ゴミを拾っている新に見つからないようにそろりそろりと民宿の裏に回って国道に出た。

新に見つかると手伝えたなんだと「うむわい」のだ。
「つけはお姉さんなんだぞ。」

まったく、

まい、行くんだる

国道に出ると、クノイチは早速ナンパを開始する。上手い具合に犬の散歩中の中学二、三年ぐらいの女子を見発見、背後から距離を詰め、思い切って声をかける。

「へい、オネーちゃん。犬の散歩ついでにおれも散歩してみようぜ！」

その女子はちらりとクノイチを一瞥したが、無視して行ってしまう。散歩されていた犬にまで哀れみのこもった目で見られている感じがする。

その後も道行く女子にナンパをしかける。主に女子中学生、若い大人の女人人がクノイチのターゲットである。自分でもよくわからないのだけど、クノイチは同年代の小学生女子には全く興味がない。なんでだろ。でもあいつらバカだからなー。

自分のことは完全に棚にあげっぱなしのクノイチである。

結局、誰も引っかかるなかつた。もはや何敗したのかもわからない。なんだかもう負けることに慣れつつある自分がしょぼく感じる。クノイチはナンパを一旦やめて、ガードレールの上にひょいと乗つかつて休む。車道を凶暴な鉄の塊がびゅんびゅん法廷速度三十キロオーバーで突進している。この国道は上空から見ると、まるでサーキットみたいにきれいな橢円形になつていて、どういうわけか警察権力の監視の目が薄く、走り屋たちの穴場的スポットになつているのだ。

あーあ、おれもかつこいい車でも買えばナンパに成功すんなのかなあ。

そんなことを考えていると、ふと家族連れが目に留まる。小学一年生ぐらいの男の子を、母親と父親が左右から挟むように並んで手を繋いで歩いている。何を話しているのかは車のエンジン音やらでよく聞こえないけど、にこにこと笑っているのはたしかだ。

「二二」、行くんだろ。

クノイチは自分の両親に思いを馳せる。

『一太あ、『ご飯の時間だよー』

『ほいほーい』

母と息子のやり取りのようだけど、実は違う。「母の母」と「娘の息子」つまり祖母と孫のやり取りだ。

クノイチの両親は仕事で忙しく、海外を飛び回ることもしそうちゅうで、ほぼ全くと言つていいくほど家に帰れなかつた。そこで母方の祖母の家にクノイチは預けられた。祖父はクノイチが生まれる前に他界していたから、祖母と孫の一人きりだつた。

その祖母が死んだのは二年前。クノイチが小学校三年の時だ。告別式やら何やらが終わり、祖母の家に落ち着いたとき、クノイチは母親に言われた。

東京に戻つてきなさい、と。

クノイチには、邪魔だから祖母の家に預けて今度は戻つて来いや、としか思えなかつた。納得がいかなかつた。それに転校だつてしたくない。友達だつているんだぞ。

嫌だ嫌だというクノイチに負けて、母は祖母の家からほど近い『民宿熊島』にクノイチをずっと宿泊させることにした。

このときが、クノイチが最初に大人になりたいと思つたときだつた。大人になれば、なんでもできるのに。母さんや父さんがいなくても、ちゃんと自分の力で生きていけるのに、と。
だから、ナンパに成功して大人のように見えるアフロ兄弟が、羨ましい。

大人つて、重いなあ

おうとうと、思わず心の黒アルバムを広げちゃつたぜ。

クノイチは頭を振つて、ガードレールから飛び降りる。太陽はかんかんに照りつけ、むしむしした暑さが地面からむあつと湧き出でいる。六月でもうこんなにあちいんだから、夏休みになつたら百度はいつちまうね。なーんて思つてゐところで、ちゃーんす。

クノイチはこちらに向かつて歩いてくる一人の女子をロックオンする。二人同時にロックオンなんて、おれってスゲー、と自画自賛するクノイチ。

接近してくるにつれ、一人の女子が中学生ぐらいとわかつてくる。頭の中でキメ台詞を乏しい語彙力の限りを尽くして構築する。

ぎひひ、カンペキすぎるぜ。今だーつ。

「へいへい、オネーチャンたち、おれが泊まつてるホテルに遊びに来ないかい？ ゴージャスで有名人御用達、キングサイズのベッドもあるぜい」

泊まるところはどこだつてホテルだよきつと。ベッドだつておれの体の大きさじゃキングサイズなのだ。有名人は……おっぱい大きいし春日井ちゃんならきつと何かで有名だと思うよ。

「はあ？」「なーにこの子ーつ。ぎやははははつ！」

酷いリアクションを頂戴してしまつた。一人は呆れ、もう一人はクノイチの言葉で笑いその姿を見てまた笑う。呆れてるほうの女子が「阿呆」とこの暑さも吹き飛ぶほどの冷ややかさでもつて言い放ち、二人はクノイチを通りすぎていく。

あ、あはははー。まあいつものこといつものこといつものこと。いーつーもーのーこーとー……俺つて、阿呆？ 大人じゃなくて、阿呆？

クノイチは何かがポキリと折れたような音を聞く。それは頭の中で残響となつてクノイチの骨に響くように広がつていいく。どう

して……駄目なんだろ。

「おはー、クノイチ」

後ろから声をかけられ振り向くと、滝川がいる。手を団扇代わりにぱたぱたしている。

「おはははは……」

おはははー。もういーやーだーよー。

「どうしたんクノイチ、ナンパしくつたぐらいで氣落とすなって。何度もナンパしていくうちにきっと成功するよ

みーらーれーてーとうわー。

頭をぽんぽんと優しく叩かれる。少し、気分が落ち着いてくる。

「そうだよな、きっとそのうち成功する……かな。

「うん……そうだな。うん、そつだそつだ」

「そつだそつだそつだのだ」

「だよな。おれまだ十一歳だし、これからまたたくさんのオネーチャンたちに声かけりやいいさつ。

「うん、俺もよくわかんないけどそつだのだ」

うつし、じゃあ場所変えてみよっ。商店街のほうにでも行ってみつか。いやあそこはおばちゃんが多いなあ。駅のほうならもしかしたら！ やべーちょっと楽しくなってきた！ おれが大人になる日も近いぞっ。

「大人はスゲーよな。ナンパなんか簡単に成功させちゃうんだもん」

クノイチが何気なくそう言つと、滝川はそれをあつせりと否定する。

「んー、それは違うぞクノイチ。大人だからってナンパが上手いとは限らないよ」

「えつ

「大人の中にだってナンパの上手いヤツもいれば下手なヤツだっているよ。ナンパすらしたこともないヤツだっているよん

なんだそれ。じゃあ大人になるにはどうしたらいいんだ？

鉄平と銅平は大人じゃないってこと？ でもナンパして成功すれば大人なんじゃないの？ あれれれ？ ……もう、わけわかんね。

「……じゃあ、大人つて何？」

「クノイチ？」

「大人つて何なの？ ねえクリスタル姉、教えてよっ！」

知りたい。大人になる方法を。

クノイチはまるで滝川の中にその方法があるかの如く、滝川を見つめる。視界がブールの中みたいにぶるぶるしてくる。

水面の向こう側の滝川は、よくわからないけど黙考したまま石化状態である。春日井といい滝川といい、大人はよく石になるよな、とクノイチは思つたり。でも滝川の石化状態はなかなか元に戻らない。目の焦点が合つていなさそつな眼球が、思い出したようにぱちりと瞬きをする程度だ。

「クリスタル姉、大人つてどうすりやなれるの！」

クノイチが叫ぶと、滝川の石化状態が解ける。

「……わかんないっちゃ」

滝川は苦笑いしながら言う。

「えっ！？ だつてクリスタル姉、大人なんだろ！？」

「たぶん」

「えーなんだよそれー、意味わかんねー」

「あたしだつて意味わかんねーよ」

「なんだそりゃ」

「まあ、わかつたら教えてやるぜい」

なんだそれ？ どうやつて大人になるかわからないのにどうして大人になつちゃつてんだよー。ていうかそもそもクリスタル姉は大人なのかなあ……。

色々な考えが去来するけど、ひとまず大人になる方法を教えてもらえる約束をしたんだから、よしとしよー、とクノイチは納得、することにする。 本当はあんまりナットクしないけどな！

「……約束だぞ」

「女に」一言はない

それって男じゃなかつたっけ？

「はあ……」「

「いつちよまえに溜息なんかついて、一億年早いぞ少年」

「クリスタル姉のせいだ」

「あたしのことはクリステルと呼びな

「クリステル姉のせいだ」

クリスタルのほうがいいと思うけどなあ。

「もう、しゃあないなー」

滝川は「やれやれ」と言しながら、ズボンのお尻のポケットから茶色い革の本を取り出す。何の本だろ。

「クノイチ、お前にこれを授けよう」

滝川がそれをクノイチに差し出す。わけもわからずそれを受け取ると、思いのほか重いことに、クノイチはびっくりする。

「お？…………こ、これは！？」

「ふふふ、驚いたか

「これ、何？」

「……」

滝川が言うには、それは手帳というもので、大人はみんな使つているという。かなり高いんだぞ、とあとから付け加えていた。

そういうえばクラスの女子が手帳使つて予定とか日記を書いてたなあ。でもこれは女子が使つてんのとは全然違う。

クノイチは手帳の重さからそう判断する。女子が使つているのはキャラクターの絵だとかピンクや黄色のテカテカした感じだけど、滝川がくれたものは馬を撫でているようなさわり心地で、まるで手帳そのものが生きているみたいだ。

クノイチは思った。大人つて、重いなあ。

鍋の中のお豆腐状態だぜっ

しかしその日の夜、クノイチが手帳を開いてみてみると、クラスの女子も書かないような落書きを見つける。

『フクオカのバーか！ はーげ！ うーんこー..』

週間の予定を書くページにでっかく油性マジックで書かれている。フクオカって福岡県のことかな。クリスタル姉は福岡県が嫌いなのかも知れないな。よくわかんないけど。

はー大人って大変なんだなあ、とクノイチはなんとなく思う。部屋の時計を見ると、もう十一時を過ぎている。ゲームでもしようか、と思ったけど、今日はなんだか胸の辺りがもやもやして疲れたから寝ることにする。

「えーっと、リモコンリモコン」

クノイチはエアコンのリモコンを搜索、ゲームソフトの箱に埋もれていふところを救助、おやすみタイマーをセットする……が。

「おお？」

クノイチが時間設定をしてタイマーのボタンを押した瞬間、エアコンは「ふしゅー」とフルマラソンを終えたランナーのように空気を吐いて停止する。電源スイッチを押してもまるで反応しない。

「え？ なになに？ 活動限界？ コンセントついてんのに？」 クノイチは電源スイッチを某名人のように連打する。けれど反応はない。「えええーちょっと待てよー。このクソ暑いのにエアコンなし？ そんなん鍋の中のお豆腐状態だぜっ」

クノイチは机の椅子を引つ張つてエアコンの真下に置き、その上に立つ。エアコン本体の電源スイッチを思い出したのだ。爪先立ちでどうにか本体の電源スイッチに人差し指が届く。「よっしゃ！ つてありや？」

エアコンは蘇生せず沈黙したままである。そして無理な爪先立ちをしたせいでクノイチの足はつてしまつ。「あぎやぎやぎやつ

「アーハンは完全に壊れてしまつたらしき。

椅子の上にうずくまり、足のつりが治るのを待ちながら、クノイチは今夜の寝床をどうするか考える。真っ先に滝川の部屋に転がり込もうかと思ったが、今が十一時過ぎだということを思い出してクノイチは諦める。滝川は十一時になるとパタリと寝てしまうのだ。なので遊びに行く時は必ずそれより前に行くようにしているのだ。
「マジかあ……。春日井ちゃんのところは……うーん……そこまで仲良いわけじゃないし……。新一ーチャンやジジイは男だしな。女の部屋じゃなければ転がり込む意味がねえ、と実に子供らしくない判断をし、クノイチは自分の部屋でパンツ一丁になつて眠ることにする。運悪く、その日は六月だというのに熱帯夜となり、クノイチは翌朝汗だくで畠を見ますこととなる。

「ヘイジジイ、おれは育ち盛りなんだぞ

あむけむかひ、汗まみれのおれオハヨーちゃん。

六月二十六日、日曜日、朝六時半、クノイチは目を覚ます。起きてすぐにパンツ一丁の自分にぎょっとするが、昨夜のことを思い出して腑に落ちる。　そーだつたそーだつた、エアコンは大破しちやつたんだよなあ。

もちろん大破などしていない。「大破」と言いたいだけである。汗だくなので軽くシャワーを浴び、それからTシャツとハーフパンツに着替えて一階に降りる。すると、紀伊介と春日井がこそそと小声で話をしているところにでくわした。

クノイチが顔を出すと、二人ともハッとしたような顔をして、にこにこと引きつった笑みを浮かべる。大人がこういう顔をするときは、儲け話かエッチな話をしているというのが相場、だとクノイチは思っている。　怪しいなあ。ま、いいや。それより朝ご飯が先だぜ……ってオイ！

出されたのはカップ麺ただ一つ。紀伊介は無言でお湯を入れ、クノイチの前に置く。食え、ということらしい。　あれー、ご飯は？　納豆は？　味噌汁は？

「ヘイジジイ、おれは育ち盛りなんだぞ」

クノイチは抗議する。

「安心せい。お前は現時点で育ち切つとる」

「なんだどう」　百四十五センチで育ち切るなんてありえね。ありえねえで欲しい。

「新二一チャンは？　一ーチャンがご飯作ればこんな悲惨なことにはないぜ」

「旅に出た」

「旅？」　なんのこっちゃ。　そーいやさージジイ

「なんじゅ。洗うのが面倒だからスープも全部飲んで自分で片付け

「うよ

「うげー、おれは密なのにー……つてそりゃ、密であるおれの部屋のエアコン動かないんだ。困った困った」

「一生困つておれ

「直してよ」

「自然治癒する」

「ジゼンチコ?」

「放つておけばよくなるつちゅうことじや

よくならねー。

ジジイはあてにできん、と思つクノイチである。

ふと春日井のほうを見やると、パジャマ姿でおっぱいの谷間がくつきりと見える。あの谷底に顔から落下してみてえ……。

クノイチはおっぱいばかり凝視していたので気付かなかつた。春日井がいつになく真剣な表情を浮かべていることに。もしそれに気付いていれば、この場の空気がいつもと異質であることにも気付いたかもしれない。

つと、おっぱいばかり見ててもしようがないや。

クノイチはカップ麺を記録的な速さで平らげ、部屋に戻り、滝川から貰つた手帳をティバックに入れて背負う。手帳はクノイチにとってお守りのようなものだ。持つていると、大人になつたみたいな気分になれるのだ。

さらに乗り物があればいいのではと考へたクノイチは、滝川の赤い彗星号を借りることにする。滝川が言うには、なんでも三倍のスピードで走れるらしい。超ボロいんだけど……。

サドルを限界まで下げる、地面に爪先しかつかないが、無理すれば乗れないことはない。クノイチは赤い彗星号に乗つて、『民宿熊島』を出る。

今日も『大人への階段』だと思われるナンパをするために。

『大人になりたい』

クノイチは例によつてナンパを開始。撃破、されまくる。それで
もクノイチはやめない。

もしかしたらナンパに成功したつて大人にはなれないかもし
れない。ナンパしたことない大人だつているらしいし。でも、ナン
パが大人になるための一つの方法だとしたら? ほかに色々な方法
があつて、ナンパがその方法の中の一つだとしたら? 今のおれに
はナンパ以外にそれっぽい方法がわかんないんだ。だつたら、同じ
方法を試し続けるつきやないよ。それに……。

「ヘイ、ネーチャン! おれの赤い彗星号に乗つてドライブしよう
ぜいつ!」

声をかけた女子は面倒臭そうに手を振つてクノイチから遠ざかっ
ていく。けれどクノイチはそんなことをもう気にしない。

成功してもないのに、ナンパが大人になる方法じやねえなん
て、そんなのわかんないよ。

今日も梅雨明けしたんじやないかと思うほどによく晴れて、暑さ
は一ヶ月ぐらい先の未来を引っ張つてきたように夏のそれである。
クノイチは浜辺に沿つて敷かれた国道の歩道を赤い彗星号で流れ
ながら、女の子を捜し、撃沈され、探し、撃沈され、を繰り返す。

『大人になりたい』

その思いが、撃沈されたクノイチを癒し、鼓舞し、また前へと進
めさせる。

そんなクノイチを遠くから双眼鏡で覗いていたのが、アフロ兄弟
こと鉄平と銅平である。

「……ふうけんなよ」

あつひい。

ガードレールの上に座り、クノイチは休憩中。赤い彗星号はすぐ横に停めてある。ナンパの戦績は無勝記録を更新中だ。コンビ二行つてジユースでも買つか。

クノイチはガードレールからぴょこっと飛び、地面に着地した瞬間、背後から背負っていたデイパックを奪われる。

「えつ……」

一瞬、何が起きたのかわからなかつたが、後ろを振り向き納得する。アフロ兄弟の兄のほう、鉄平がいる。ニヤニヤしながらクノイチのデイパックを片手で振り回している。

「何すんだよつ」

「へへへ、ナンパは上手くいつたかクノイチ？」

クノイチを無視して鉄平は言つ。「一十七連敗したみたいだけど？」

見てたんじやないか。しかも数えてるし。

「いひひひ、いい加減諦めろよ。お前じや俺らみたいに成功しねえつて」

「そんなのやつてみなきやわかんないだろ」

「わかるぜ」

「つうかそれ返せよ。俺んだぞ」

「いひひひ、なーに入つてんのかなあ？」

やたらと語尾を上げて言う鉄平に、クノイチの頭は敏感に反応、血管を巡る血液が加速度的に流れを速くし熱を持つ。そんなクノイチをあざ笑つかのように、鉄平はデイパックのジッパーを開け始める。

「オイやめろよつ あつ」

鉄平に突撃しようとするクノイチを、誰かが後ろから羽交い絞め

にする。動こうにも躊躇にでもされているかのよつよびくともしない。

だ、誰だよ。

「ぎひひひ、ヨークノイチちやーん」

アフロ兄弟の弟のほう、銅平だった。「まあ落ちつけよ。な?

ちーっと持ち物検査するだけからかう。なー兄ちゃん」

「おうよ。俺たち兄弟はいつだってこの町の平和を守っているのだ

「いるのだ」

弟が調子を合わせる。

そして銅平はディパックに手を入れて中をまさぐる。「……ん、こりゃ何だ?」

銅平が取り出したのは滝川からもらった手帳である。「本か?」

「あー! それに触るんじゃねえよつー」

クノイチはじたばたと暴れるが、銅平の羽交い絞めは全く外れそうにない。「離せバカアフロつー!」

「離せつて言わると離したくなるなあ。俺、反抗期なんだよねえ」

銅平はゲラゲラと笑いながら言つ。笑うたびに唾がクノイチの頭に降ってきて汚いことこの上ない。

そうこうしているうちに、銅平は手帳のページをめくり始める。

「なんだこれ、落書きじやねえか。変なの」

「兄ちゃん兄ちゃん、俺にも見せてよ」

「待て待て。もー少し」

「兄ちゃんつー」

「だから待てつて。もー少し。もー少し」

「うーうー、いつもそれだよー」

銅平がむくれる。そのせいか僅かだが羽交い絞めの力が緩む。クノイチはその隙を逃さない。思い切り飛び上がり、銅平の顔面に頭突きをお見舞いする。「おーじつー!」

銅平が悲鳴を上げて鼻を押さえている。羽交い絞めは完全に解かれる。

「あつバカ！ 何やつてんだよ銅平！」

鉄平が叫ぶ。

「お前もバカだつ！ それ返せ！」

クノイチは鉄平が持っている手帳のページの部分を掴む。だが鉄平は手帳のカバー部分をぎゅっと掴み、その手を離さない。

「くされアフロッ、手離せよ…」

「つるせえチビクノ！」

綱引き的な様相を呈している。クノイチも鉄平も全く譲ろうとしない。左右からの引力に、手帳は徐々にその形態を変化させ限界を突破する。

びりりりっ。

「ああつ！」

手帳のページが破ける。クノイチの手にページの部分が、鉄平の手には手帳のカバーがそれぞれ納まっている。

クノイチは手にしているページを見やる。破けたところがキザキザでボロボロ、『民宿熊島』の本棚の古っさい本より無残な姿だ。

「あーあ、破けちまたよ」

鉄平が眠たそうに言い、手帳のカバーをひらひらと団扇のようにあおいで自分に向けて風を送る。手帳がぞんざいに扱われているその様は、クノイチの怒りの炎に油を注ぐ。

「……ふざけんなよ」

「あ？」

「ふざけんなって言つてんだよ…」

クノイチは鉄平に体ごと向かっていく。頭の中に滝川の顔が浮かんで泣きそうになるのを、拳を握つて誤魔化して。

最低だ

最低だ。クノイチは心の中でそう吐き捨てる。どうにかデイパックと手帳は取り返せた。鉄平と銅平の二人相手によくこれだけできたと思う。いつもなら学校で友達の誰かが加勢してくれるけど、今日は一人だった。それでも負けなかつた。痣とか擦り傷がいっぱいできただけど、それでも負けなかつた。

けれど、ページが破けてしまった手帳を見ると、悔しくて視界がにじむ。

せっかくクリスタル姉がくれたのに……。

しばらく持つて歩いていたが、見ていると辛くなるので、手帳はデイパックの中に入れなおした。なんだかデイパックが肩に重くのしかかつたような気がした。

クノイチは自分でもどこに行くのかわからないまま、国道を商店街の方角へ歩く。汗が顎からぽたぽたと垂れ、体が干からびていくような気分だ。いつそそのまま干からびてしまいたいとさえ思つてしまふ。

赤い彗星号は手で押している。なんだか乗る気分になれない。アフロ兄弟と戦った際に、赤い彗星号を盾代わりにしたり乗つたまま突撃なんかしたので、より一層ボロくなってしまった。車輪が回転するとガラガラと不快な音まで立てるようになつてている。

バカアフロめ……。

車道を物凄いスピードでスポーツカーが走っていく。ブオンと爆音を立て排気ガスを撒き散らし、クノイチの真横を過ぎていく。クノイチは何気なくその車を見やる。アニメっぽい女の子の絵が描かれているのが見える。

変な車……。

アニメ絵の車は国道を突つ走つしていくのかと思いきや、すぐそこのある駐車場に入る。ほとんどドリフトみたいに曲がり、駐車場の端っこに頭から入つて停車する。運転席から一人の男が出てくる。

男はやけに早足で歩き駐車場を出て、クノイチのほうに近寄つくる。

クノイチは通り過ぎようとしたが、男が赤い彗星号のハンドルをガシッと掴んだのでつんのめるようにクノイチも止まつてしまつ。

「あつ、えつ？」

「その自転車、君の？」

男はクノイチに訊く。声と姿は爽やかな好青年のよつに見えるが、目の色が怒つている。クノイチは不安を覚える。な、なんだよこの人……もしかして誘拐？ やべーよお……周りには……。

クノイチはきょろきょろと周囲を見渡すが、あいにく通行人はいない。車はやたらと通つているけど、どの車もバカみたいにスピードを出して誰も止まりそうもない。

「おい、俺の質問に答えろよ」

「は、はい」

男の口調が急に乱暴になつたこと、クノイチはびっくりする。「その自転車はお前のか？」

「あ、ええと……と、とも、だちの」

「あ？ なんだって？ 声が小さくて聞こえないんだけど」

男はイライラしたように吐き捨てる。「ていうかさ、お前、滝川つて女知つてる？」

「た、たきがわ？」

「そう、滝川。滝川花子。自分のことをクリスティルと呼べ、だとか言つてる変なやつ」

「こ、こいつ……誰だよ。どうしてクリスティル姉のこと知つてんだよ……。ていうか花子？ おお？ クリスティル姉つて花子なの？ ううん、もしかしてクリスティルつてあだ名？ おれの『クノイチ』みたいに。」

「知らないのか？ もし滝川のことを知らないのならお前は自転車泥棒だ。もし知つているのなら、俺をそいつのところへ案内しろよ。あいつを連れて帰らなきゃならないんでね」

連れて帰る、と聞いた瞬間、クノイチは口を固く閉めようと即断する。　言わないぞ、絶対に何も言わないぞ……。

クノイチは滝川と一緒に、駄菓子屋に行つた時のことを思い出す。滝川が『民宿熊島』に来てまだ三日目のことだ。

ずっとずっとずっと……

『うへーハズレだわー』

『クリスタル姉、くじ運わりー』

『このクジってホントに当たりあるの？ そしてあたしのことは

クリステルと呼びな』

『おれはあるぜい。それも一回！』

『なんてこつたい』

『ていうかさー、大人なんだからクジまるいと全部買っちゃえば？ そうすれば当たるよつ』

『わかつてないねークノイチ。そりやあ情緒にかけまくりだよ』

『チョウチョ？』

『情緒、だよ。まあ、大人になりやわかるぜ』

『ふーん』

『よーし、決めたつ。あたしはこのクジが当たるまで絶対に帰らないぞ。ゼーつたいだ！ 誰があたしを連れ帰ろうとしても、絶対にここに踏みどじまつてやる！』

そのくじ引きは当たると大きなスーパーボールを、ハズレだと小さなスーパーボールがもらえる。滝川はそれから幾度となくその駄菓子屋に行ってくじ引きを引くが、未だに当たりを引いていない。滝川の部屋にはハズレの小さいスーパーボールがそこかしこにころぶり転がっている。

誰があたしを連れ帰るつとして、絶対にここに踏みどじまつてやる！

滝川の言葉がクノイチの口をぴたりと閉じる。

あのくじ引きが当たるまでクリスタル姉はここにいるんだ。

……ていうか、当たらなくとも当たっても、ずっと……。

ずっと、なんだ？

ずっと……ずっと……。

「おいこら、何黙つてんだよ。何か言えよ。滝川を知つてんのか？ 知らないのか？」

男がクノイチに詰め寄る。ぐいっと顔を近づけ凄んでくる。「やっぱてめえ、自転車泥棒なんだろ。車から滝川のチャリが見えておかしいと思つたんだ。滝川にガキの知り合いがいるなんて聞いたことないからな」

ずっと……ずっと……ずっと……。

「おい、だんまり決めこんでじゃねえよつ。ガキだからって許されると思つてんじゃねえだろうな。あめーよ。とりあえずお前を警察に突き出すぞ俺は。警察のこわーいオッサンと一緒に取調室でデード。はははっ！」

男の笑い声はかなり大きかつたけど、クノイチの耳には一切入つてこない。ただ『一緒に』という部分だけは頭の真ん中を突き刺して、クノイチに答を示した。

おれ、クリステル姉と、ずっと、一緒に、いたいなー。なんて、思つたり？　えへへ。

思つだけで恥ずかしくなつてくるクノイチ。でも、それが本当の気持ちなのだ。クノイチはもう迷うことなく、男がいうところの「だんまり」を決め込むことにする。警察なり刑務所なり好きなどこに連れてけといわんばかりに。

マハリもじやおれの」と?

どれぐらい時間が経つただろう。男の詰問はまるで止む気配がない。だんまりを決め込んだクノイチだけ、さすがにうそざりしてきている。うげえ……先生より説教なげー。でもマシンガンの如く連射される罵倒は唐突に止む。男は突然叫ぶ。

「あ、花子つ！」

男が声をあげた先をクノイチは見やる。滝川がこちらに歩いてくるところである。なんだかバツが悪そうな顔をしていく。

「や、やあ成川くん」

「お前つてヤツは……やあじゃねえよ」男はイライラしたふうに頭をかきむしる。「でもやっぱこの辺にいたかー。お前、ここの氣に入つてたからな」

「あははは

「ていうか花子、チャリ盗まれてんぞ」「盗んでないっての。

「盗まれ？」

「こいつだよ」こいつ

成川はクノイチを指差していく。「このクソガキ、盗んだくせに何もしゃべらねえんだ。怪しいったらないぜ」

「いや成川くん、この子は別に自転車を盗ったわけじゃないんだって」

「どうだかな

「本当だつて。この子はあたしが泊まってる民宿にいる子なんだよ。なー、クノイチ」

クノイチは「クッ」と無言で小さく頷く。なんだかクリスタル姉らしくないぞ……。控え目つていうか大人しいっていうか……どうしちゃつたんだろ。

「まあこんなガキはどうでもいい。花子、帰るぞ」

「……え？ 帰る？」

帰る！？

「もしかしてあたしを連れて帰るためにここに？」

「当たり前だろ。ほかに何があるつていうんだよ。お母さんから聞いたぞ。花子がいなくなつちまつたてな。会社からばつくれるは上司に電話で暴言吐くはそのまま行方くらますは、まったく、大人のすることじやねえだろ」

「ふつちーん。

クノイチの頭の中でそんな効果音が木霊する。大人のやることじゃないつて、お前がやつてることだつて大人っぽくねーよ。クノイチはそう思つた。

あとのことは、あまりよく覚えてない。もう一人の自分が発射スイッチを押したかのように、クノイチは男に叫んでいたからだ。

「クリステル姉は大人だっ！」

「く、クノイチ？」

「クリステル姉は大人だ！」

クノイチは男目掛けて飛び掛る。　こいつはアフロ兄弟以上に許せねえつ。連れて帰るなんて、おれは認めないからな！

成川は目を見張るだけでクノイチの出鱈目に繰り出されるパンチやキックをまともに食らう。ついさっきアフロ兄弟とやりあつたせいで、あんまり力が出ない。体のあちこちが痛い。おまけに涙が邪魔して目が見えにくい。

「くつ、なんだよこのクソガキがつ！ 離れろ！」

クノイチは頭を男に押さえつけられてしまう。男の手の平はまるでテニスボールでもつかむように軽々とクノイチの頭を驚撃みしている。さらに男とクノイチの身長差がかなりあるせいが、恐竜に踏み潰されているような感覚がクノイチを襲う。振るつた拳はどれも空を切るだけで男に届かない。

「くそつ、なんでおれはこんなにちつこいんだよつ！ くそつ

くそつくそつ！

クノイチはがむしゃらに腕を振り回しながら声をあげる。

「テメエこそクリスタル姉から離れろ！ おれの女に手出すんじゃ
ないぜっ！」

「バカかこのガキは！」

だ、駄目だ……鉄平と銅平なんかとは全然違つ……。スゲー
力だ。敵わないよ……。やつぱこれが大人なのか……子供には何も
できないの？

と、男の手が離れ、クノイチは急に自由になつてびっくりす
る。おお？

見れば男は鼻から血を流している。手で鼻を押さえ、ふるふると
震えている。

「な……なに……するんだよ」

男は呻くように囁つ。

「失せろ成川。あたしのマブに指一本触れるんじゃないぜ」

「おお？ マブ？ マブってもしやおれのこと？ マブダチつ

てやつ？ ……すっげー嬉しいんだけどつ！」

「くーつ！ おふくろにも叩かれたことなんてないのにーー！」

男は泣き喚きながらスポーツカーに乗つて去つていった。やかま
しいエンジン音が波の音を一瞬かき消したが、すぐにまた穏やかな
潮騒がその場を埋める。

逃げていく男の後姿を見て、クノイチは思う。
あれって大人なの？ と。

「やーて、阿呆もいなくなつたことだし、古道具屋に行くかー。クノイチも来る？」

よくわからないけどクノイチは「うん」と頷く。古道具屋に行く間、滝川はモンハンの話ばかりしていて、せつときの男のことは一切触れなかつた。本当は男のことが気になつて仕方がないクノイチだつたけど、訊いちやいけないような気がしてやめておいた。よく考えたら、滝川だつて自分のことをほとんど説いてこない。触れなくていいこともあるんだなー、とクノイチはほんやりと思つた。古道具屋で滝川は時計を買い取つてもらつていた。千五百円だつた。滝川は買い取り金額の安さをブーブー言つていたけど、その割にサッパリした顔をしていた。

そして帰り道。国道の歩道を歩いていた滝川が唐突に立ち止まる。

クノイチは男のことはもうじりつでもよくなつっていたが、手帳のことがどうしても頭を離れないでいる。あんなにビリビリじゅあ直すのは無理っぽいよなあ……おっと。

滝川が立ち止まつたことに遅れて氣付くクノイチ。滝川はクノイチのほうをじつと見たまま活動限界っぽく止まつている。

「クノイチ」

「ん」

「おっぱい揉ませてあげよつか

「えつ！ いいのー？」

「おっぱい！？ おっぱいってあるおっぱいのことー？ 二つ

あつてほよほよしてそーなあの物体のことだよね！？ やべーよー！ アフロ兄弟だつて絶対に触つたことないんじゃねー？

にわかに興奮するクノイチである。もはや手帳のことなど忘却の

彼方だ。

「おつぱい。ビーンとこいや」

滝川はぐいっと胸を張る。こんなときに限って歩道を歩く人が結構いて、何事かとじろじろ見てくる。けれどクノイチはそんなこと気にしない。この期を逃してはもしかしたら一度とおっぱいを触ることなんてないかもしないのだ！ と勢いづき、ぐんと腕を伸ばして滝川の胸を驚掴みにしようとする。

が。

おお？ 掴みにくいや。

想定外の平たさに困惑する。おかしい。おっぱいというのは、もつといつふにふにとできて、ふにふにとした感触が楽しめるものだと言い伝えられているはず。けれど滝川のおっぱいはどうにもおっぱい伝説で聞くものは随分と違った形状をしている。肉をかき集めるようにして膨らみを一転に集中させ、ぐいぐいと絞るように揉む。「揉む」と言えるのか甚だ疑問であることに汗を螺旋つて頂きたい。

「どーよ、あたしのパイオツは」

感想を訊かれてしまった。しかもかなり得意げに。 ビ、ビうしょ。おっぱいっぽくないとか言えないよなあ。平たいけど柔らかい。そんな感じなんだよなあ。

滝川の胸を的確に言い表す言葉は何かないのか、とクノイチは頭をぐるぐると回転させる。ナンパするときのキメ台詞を考えるとき以上に。 おっ、あつたぞっ。平らだけど柔らかいもの！

「例えて言つなら」

「例えて言つなら？」

へへへ、クリスタル姉、喜ぶぞきっと。

「はんぺん」

力のこもったチョップを食らつクノイチだった。 エー、はんぺん白くてカワイイじゃんかー。おでんの具としても最高だぞ。頭蓋骨に衝撃を受けたせいだろうか。クノイチの頭に、ふと昨日壊れてしまったエアコンとさつき行つた古道具屋が浮かぶ。

「あ、そーだ。クリスタル姉、ちょっと古道具屋に戻つていい?」

「いいけど、なんか買うの? あたしのことはクリステルと呼びな」

「エアコン。クリステル姉」

「エアコンだつて?」

「うん、おれの部屋のやつ、壊れちまたんだ。ジジイは直してくれないし、こうなつたら中古でもいいから買つかなーって」

「クノイチ、金あんの?」

「一千円もあるぜい」

「こんぐらいあれば十分だらう、クノイチはそう思つて疑わなかつた。クノイチが知つている物の相場は、せいぜいゲーム機が上限であるのは言つまでもない。

センブーキ？

「げつ、あたしが売ったロレックスが三千円で売られてる……」
古道具屋『近堂』に着くなり、何やら滝川が絶句している。達磨の隣に陳列されているそれは、滝川がついさっき売った時計で、値札には『3000円』と達筆な字で書かれている。

クノイチはそんな滝川は置いといて、店主のおばあさんに話しかける。おばあさんはノートパソコンのキーをカタカタと打っていた。「ばあちゃんわー、ニアコン欲しいんだけど置いてる?」「あるぞい

「いくら?」

「なななーんと驚きのお値段七千円じゃ

え、ちょっと待ってよ。高くね? 中古のゲームソフトぐらいだと思ってたんだけど。確かに驚きだぜ。

「……おれ、もっと安いのがいいんだけど

「なななーんとこれが最安値じゃ

なんてこいつぢや。

「おいクノイチ、扇風機があんじやん。これにしょーぜ」

滝川が指差す先には、船のスクリューを取り付けたような変な機械が置いてあった。埃を多分にかぶり、いつたいいつからここに住まわれていたのかと問いただしたい。

「センブーキ?」

クノイチは首を傾げる。

「お前、扇風機も知らないの!?」

滝川は驚愕の表情を浮かべ、わなわなと震えている。あまりのジエネレーションギャップに頓死しそうな勢いである。

「知らない

何それ。

ああああーりいいいーがあああーとおおおー

民宿に戻ると、リビングの時計は十時十分を指していた。この時間だといつも春日井がソファに腰かけて読書している姿が窺えるのだが、今はどういうわけかいない。

クノイチと滝川は202号室に扇風機を運び込む。結局、クノイチが持っていた二千円と滝川が時計を売つて得た千五百円を足して買つたのだ。

部屋に置き、改めて眺めてみると、その昭和じみた旧型つぶりがなんとも哀愁を誘う。滝川はしみじみとした感じに「いいねえ」と言った。クノイチはそもそもこのメカがいつたい何を目的として製造されたものなのかすらわかつていなが。

「いやあ、この民宿にまたマッチするねー」

「ふーん、よくわかんないや……おお？」

天井から何やら「ゴトゴト」と音がする。何か荷物を床に降ろしてい るようない物音だ。

「なんだ？ この上つて何かあんの？」

滝川が訊く。

「屋根裏部屋があるらしいよ。物置になつてほとんど使われてないつて新二ーチヤンが言つてたけど」

「へー。そうなの。ジジイが掃除でもしてんのかな」

「うーん、わかんない」

「ま、いつか。それより扇風機を起動させようや」

コンセントを接続し、スイッチを入れる。すると、扇風機の羽がぐるぐると回転を始めた。同時に首が回り始め、202号室に風を吹かせる。

「やつとわかつたよ。こつやつて使うもんのかあ

「ふつふつふ、クノイチ。あんたはまだ扇風機の本当の使い方をわかつちやいない」

滝川は不敵な笑みを作ったかと思つと、扇風機の首の動きを止め、回転する羽のまん前に顔を出す。そして……。

「アア」

と声をあげる。滝川の声がぶるぶると震えた感じになる。誘拐犯みてえだ、とクノイチは思つた。ちなみにクノイチが言つ誘拐犯といつのは、ボイスチェンジャーを通した声を意味する。

「アア」

「すげー、声がぶるぶるしてりつ」

「つたく、今のガキはこんなことも知らねえのかー。ほれほれ、クノイチもやってみ」

「う、うん」

滝川がどいて、今度はクノイチが扇風機の中心に顔を近づける。

「アア」

おおつ。「すげー」すげーという発音もバイブルー・ショーン的である。

そのとき、扇風機の風で何かが舞う。バサバサッと鳥が羽ばたくような音が同時に響く。

「あーっ！」

クノイチは思わず悲鳴をあげてしまう。

それは破けた手帳のページだった。床に放り出しておいたティパックの口からはみ出していたらしい。それが扇風機の風を受けて飛んでしまった。

「どうしたどうした！？　あ？　あれって……」

部屋にはひらひらと手帳のページが紙ふぶきのように舞っている。クノイチはそれを見て「しまった」と頭を抱える。破けたことをすっかり忘れていた。せつかクリスタル姉にもらつたつてのに……。どうしよう……。

恐る恐る滝川のほうを見てみると、滝川はいつの間にかページの一部をキャッチして、「つわー、あたしこんなこと書いてたなーそういや」と、なぜかおかしそうに笑っていた。

「「」「めん……クリステル姉」

「な、何？ マジなテンションでいきなり……つーか名前合ってるし……キメ台詞を取られた感がなぜか悔しい滝川クリステルですこんにちは次のニュースです。 で、どしたの？」

「それ…… 破けちゃったんだ…… 手帳」

「え？ ……あー、そゆことね」

滝川何かいいことでもあったかのよつに笑っている。「あつはつは」

「な、なんだよー」

「いやいや、こんなもんは破つてよかつたのさ。 あたしの黒歴史の遺物みたいなもんだったし」

「黒歴史？」

おれの心の黒アルバムみたいなもんかな？

「そーかそーか。 あんたはせっかくもらつた手帳をこんなにしちまつて、 尊敬するこのあたしに顔向けできないと思つたのだね。 うんうん、 そーかそーか。 可愛いとこあるじやない。 あつはつは」

クノイチは滝川に頭をクシャクシャとたれる。 くすぐつたくて、 どうにも恥ずかしい。 自分だけ焦つて泣きそつになつて、 なんだか馬鹿みたいだ。 まあ、 嬉しいけど

「む…… でもなんかむかつく……」

「照れる照れる。 もつと照れる」

「うー…… あ、 でもその破けたのビツじょ…… それ、 もう捨てるしかないの？」

「リファイルは捨てるつきやないけどカバーさえあればビツじょでもなるよ」

「りふいる？」

「このページの部分のこと。 中身は別に売つてるから問題ないのであーる。 ほれ、 こうやって交換すりやいいのよ」

滝川はそう言ひと、 ページの部分を外してみせた。

「おお！」

「ほれ、これでオーケー。リフィルは今度買いに行くか。この辺りや売つてなさそうだから町まで出るつきやないけど。ほい」

クノイチは手帳のカバーを受け取り、大事そうに抱きしめ、扇風機に向かって「アア」と叫ぶ。声がぶるぶると震る。涙声を誤魔化すのに丁度良い。

「あああーりいいいーがあああーとおおおー」

クノイチの部屋の掃除に時間がかかつてしまつた。

やれやれ、客室つていうより子供部屋だよなあ。

新は首を回しながら、今度は203号室のドアをノックせずに開ける。203号室の春日井弥生は午前中はいつもずっと一階で読書をしているのだ。ついさっきもソファに座つて読書中の春日井を見かけたばかり。

春日井の部屋はクノイチとは違ひきれいだ。旅行鞄がぽつんと隅に置かれ、あとはせいぜいハンガーにかかつたカーディガンがあるのみ。ほかの荷物はクローゼットの中に納まっているのだろう。なぜかベッドの布団もシーツもしわ一つない。ベッドメイキング直後と言つても差し支えないほどである。

僕が掃除をする意味あんのかな……。散らかりすぎは気が滅入るけど、これはこれでやりがいないかな。

複雑な気分で新はまず窓を開け、空気の入れ替えをする。空気の入れ替えは口実で、ただ単に今日子がまだいるかどうか見たいだけなのだけど。

外を見ると、今日子はもう帰つてしまつたのかいない。梅雨らしからぬ真っ青な空から太陽光線が降り注いでいる。波は穏やかで、サーファーにとつては退屈かもしない。

ついさつきアフロ兄弟がいたあたりに、春日井の姿を視認する。海を眺めているようだ。春日井は時々ああやつて砂浜に佇んでいることがある。時間にすると五分ぐらいだけど。たぶん本ばかり読んでいて目が疲れるのだろうと、新は睨んでいる。

……と、春日井がこちらを振り向く。遠くだからよくわからないけど、目が合つたような気がした。新は手を振つてみた。春日井も振つてくれた。

ウツドデッキのほうを見やると、紀伊介はいなくなつていた。灰

皿に突っ込まれた吸殻からふわふわと煙が漂っている。

新は「さて、と」と呟き、あまり掃除しがいのなさそな春田井の部屋を掃除し始める。手を動かしていないと、今日子のことばかり考えてしまいそうだから。

すっぱり辞めたかったのに

「ホールディングスワークが明けて一週間近く経ったある日、田中は所長に辞表を提出した。所長は驚きのあまりその子豚的な体を椅子ごと後方にぶつ倒れた。うぐぐぐ、と呻きながら、所長はレジで読み取れば値段が表示されそうな頭部をさすりながら、這いつばばってなんとか立ち上がる。

「じょじょじょじょじょ」「冗談だろー?..」

「私はいつもって本気です」

「まままあまあ、ちょーっと落ち着いひじやないか。ね? ね?

「コーヒーでも飲むかい?」

「私は常時冷静沈着です。コーヒーはございません」

「困るんだよ……今君に辞められたら、抱えている依頼はどうすんの? 君の代わりなんていないよ。僕が全部やらなくちゃいけないの? そんなのあんまりだよー。僕ももう年で体が最近きつついんだよーー」

所長(今年五十五歳)は子供が駄々をこねるよう喧いた。

「ソーデスカ

「そんな棒読み口調にならないでよ。ね? ね? もーちつとだけ考えてよ。辞めてどうするの? 生活は大丈夫なの? この不景気に、そんな簡単に再就職なんてできないよ? 女性に向かつて年齢のことを持つのは気が引けるけど、田中ちゃんって三十四でしょ? ちょいと厳しいんじゃないかなー」

「……」

「ほーらね、よく考えてみたら無理だよ。うんうん

「なんとかしてみせます

「どうしてかー、どうして辞めちゃうの?ー

「身上の都合です

「むーん……あ、わかった! じゃあいつこよ。有給休暇が随分

残っているだらう？ しばらく休んでじっくり考えてみなよ。ね？

ね？ きっと君は疲れてんだよ。うんうん」

そんなこんなので、辞めようと思つてたのに有給、それに早い夏休みまで一緒に取ることになり、田中は一ヶ月ほどの休みを得た。あまり嬉しくない。

すっぱり辞めたかったのに。

長期休み最初の休日、田中は自宅アパートにて何をするともなくぼーっとしていた。

いつも昼夜問わず働いて、依頼をこなしてきた。じつと同じ場所で息を殺していることもあつたし、一日中歩きっぱなしのときもあつた。電車を乗り継いでいるうちに隣の県に行つてしまつたときもあつた。スケジュールは常に流動的に変化、前後、修正を繰り返し、自分の時間など皆無だった。

それが突然『じゃあお休みね』と言われて手帳に真っ白な欄が整列すると、もうどうしていいかわからぬ。そもそも辞めて再スタートを切るつもりだったのだ。休むつもりなど田中には全くなかつた。

真っ白な欄のとき、私は何をしていたのだろう。

真っ白な手帳のページを手で追いかから考えをめぐらせてみるが、ここ十年ぐらい真っ白な時間などなかつたことに気付く。十年以上前というと学生時代だが、そこまで時代を遡ると、なんだか別の人間の過去を探るような気分になる。もはや別人。

「Jのままじや自己嫌悪スパイアルに飲み込まれると警戒した田中は、なんとなくパソコンの電源をつける。 動画サイトでも巡つ

なんて考えていたのに、いつの間にか出会い系サイトで駄を漁つ

いかーん！ と言いたか『たらし』い。田中は氣合が空回りしたふうに吠えた。独りで。

田中は出会い系サイトから検索サイトに移り、思いついてホテルを
探し始める。

なんとなく海の近くがいい、と決めていた。どうせこんなふうにぼーっとするなら、景色の良いところが精神衛生上いいだろう、とう考えである。

しかし調べ始めて一時間、田中が決めたのはホテルではなく、とある民宿だった。その民宿は旅行サイトのレビューで面白い感想がいくつも寄せられていた。

『引き籠もり中学生になつた気分だつた』『孤独に徹するなり』『海が見えて一人静か時間が味わえる』『波の音を聞きながら思つた。世界に俺一人だ、みたいな』『客との距離を突き放しまくつたアンチアットホームな民宿。でも超落ち着くからフッショギー』

『海辺で静かなる放置プレイ』

これらのレビューは氷山の一角。まだまだたくさんあつた。どうも水面下で流行つてゐるらしい。料理はドアの前に置かれるだけだし、宿主の人も無愛想なのだそうだが、その静かな環境が一人になりたい人にとっては良いとのこと。変態的なレビューも散見されたが、気にしないことにしよう。

海沿いという条件は満たしてゐるが、ホテルではない。そこが田中を悩ませたが、とにかく一人で誰にも邪魔されずぼーっとしようと、そこに泊まることを決めた。

ていうかいつの間にか『一人ぼーっとする』が目的になつてゐる……。本当は一人は嫌なんだけど。でも……相手、いないし。予約の電話を要れ、翌日、田中はアパートを出た。

目的地は『民宿熊島』である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691z/>

フライ・フィッシャーズ

2012年1月13日20時49分発行